坂城町埋蔵文化財調査報告書第32集

町横尾遺跡Ⅱ

―長野県埴科郡坂城町坂都１号線道路改良事業に伴う緊急発掘調査報告書―

2008.3

坂　　城　　町
坂城町教育委員会

町横尾遺跡Ⅱ

2008.3

坂　　城　　町
坂城町教育委員会

町横尾遺跡Ⅱ（南西より）

町横尾遺跡Ⅱ（南より）

序

坂城町教育委員会教育長　　長谷川　臣

今回発掘調査を実施した町横尾遺跡は、坂城町大字南条を西に流下する谷川によって形成された扇状地のほぼ扇央部に立地しています。本遺跡の北側は中之条遺跡群で、かつての発掘調査で縄文時代～平安時代の集落址が確認されています。また、南側には金井東遺跡群が広がっており、同遺跡群の中で最大の遺跡である保地遺跡では縄文時代後・晩期の遺構や遺物が多く発見され注目を集めました。このように、今回の発掘調査地点は坂城町の中でも特に遺跡の多く存在する場所であります。

今回の発掘調査では、縄文時代～平安時代の住居址が発見されました。3棟調査された縄文時代の住居址からは、縄文時代前期の深鉢という煮炊きに使う土器や、黒曜石で作られた石器などが発見されました。弥生時代の住居址からは、真っ赤に顔料を塗られた土器群が出土しました。これらは、煮炊き用の「甕」、貯蔵用の「壺」、盛り付け用の「高坏」など、生活に必要な土器類が一そろいになっていました。住居址から出土した遺物を見ることで当時の暮らしぶりが想像できる貴重な発見でした。また、平安時代の住居址からは器の外面に墨で文字の書かれた「墨書土器」が発見されました。これは坂城町では初めてのことで、坂城町では最古の文字資料となりました。

このほか、鉄製品製作に関わると思われる遺物の出土した住居址も発見され、今後、坂城のもの作りの歴史を考える上で貴重な資料と言えるでしょう。

最後に町横尾遺跡Ⅱの発掘調査は、土中に眠る文化遺産の重要性を理解していただいた関係者の皆様方のご支援とご協力によって行うことができました。厚く御礼申し上げます。また、現地において作業にあたられた皆様には、異常気象とも言える夏の暑い中、献身的な努力と、古代文化解明へのゆるぎない情熱によって、調査を無事終了させていただいたことを感謝いたします。さらに、関係機関、関係各位には、文化財保護行政の本旨をご理解くださり、ご協力いただきましたことに心から御礼を申し上げ、序文とさせていただきます。

例　言

1　本書は、長野県埴科郡坂城町坂都１号線道路改良事業に伴う町横尾遺跡Ⅱの発掘調査の報告書である。

2　発掘調査は、坂城町より委託を受け、坂城町教育委員会が実施した。

3　発掘調査所在地及び面積

町横尾遺跡Ⅱ　長野県埴科郡坂城町大字南条4682－１ほか、約800㎡

4　調査期間　試掘調査　平成18年８月17日～８月18日

現地調査　平成19年６月５日～平成19年８月９日

整理調査　平成19年８月20日～平成20年３月19日

5　本書の主な執筆・編集は、助川・田中・時信が行った。

6　本書掲載の土器及び石器観察表は田中が作成した。

7　本書の作成にあたり、助川・田中・時信のほか、朝倉、天田、坂巻、荻野が主な作業を行った。

8　本書で使用した航空写真は、株式会社写真測図研究所が撮影したものである。

9　本書及び調査に関する資料は、坂城町教育委員会の責任下において保管されている。

10　本調査及び本書作成にあたって、下記の方々や機関から御配慮を得た。記して感謝の意を表したい。

（敬称略、五十音順）

市川桂子、倉澤正幸、小林建築（町横尾）、(社)更埴地域シルバー人材センター、鈴木徳雄、

大工原豊、谷藤保彦、平川　南、町田勝則、三木陽平、山口逸弘、山崎まゆみ

凡　例

1　遺構の略号は、下記のとおりである。

H→竪穴住居址　F→掘立柱建物址　R→製鉄関連遺構　D→土坑址　Q→特殊遺構

P→ピット　M→溝状遺構

2　遺構名は、時代別ではなく発掘調査時においての命名順である。

3　本書に掲載した実測図の縮尺は該当箇所のスケールの上に記した。

4　挿図中におけるスクリーントーンは、下記を示す。

遺構　→構築土　→焼土　→カマド

遺物　→須恵器断面　→磨滅範囲　→釉範囲　→赤色塗彩範囲　●→含繊維

5　遺物の挿図中での表記は、第１図１は、簡易的に１－１と表記した。

6　土層の色調は『新版　標準土色帖』の記載に基づいている。

7　出土遺物の観察表の法量は、口径・底径・器高の順に記載し、－は不明、（　）が残存値、＜　＞が推定値、（　）・＜　＞がない場合は完存値を示し、単位は㎝である。

目　次

序
例　言
凡　例

第Ⅰ章　発掘調査の経緯 …… 1

第1節　発掘調査に至る動機と経緯 …… 1
第2節　調査の構成 …… 2
第3節　調査日誌 …… 2

第Ⅱ章　遺跡の立地と環境 …… 3

第1節　地理的環境 …… 3
第2節　歴史的環境 …… 3

第Ⅲ章　調査の概要 …… 7

第1節　調査の方法 …… 7
第2節　基本層序 …… 8
第3節　検出された遺構・遺物 …… 8

第Ⅳ章　調査の結果 …… 10

第1節　竪穴住居址 …… 10
第2節　土坑址 …… 38
第3節　その他の遺構 …… 43
黒耀石分類概念図・黒耀石出土数表 …… 45
掲載土器観察表 …… 46
掲載石器観察表 …… 49

第Ⅴ章　総　括 …… 54

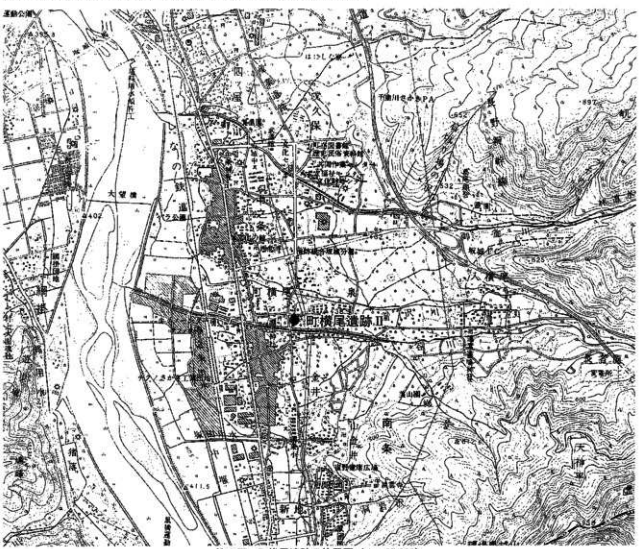
写真図版 …… 55
報告書抄録 …… 72

第Ⅰ章　発掘調査の経緯

第１節　発掘調査に至る動機と経緯

町横尾遺跡は、坂城町大字南条に所在し、標高424m前後を測る谷川によって形成された扇状地の扇央部に位置している。平成元年度に作成された『坂城町遺跡分布図』によると、縄文～平安時代の散布地とされてはいるが、同遺跡内に戦国時代の国人領主村上義清の子にあたる村上景国が処ったとされる観音坂城跡も存在しており、関連する中世の遺構の存在が予想されるなど、古代・中世の遺跡である可能性が高い。平成８年度に実施された坂城町土地開発公社の行う宅地造成にともなう発掘調査によって、古代に位置づけられる集落址が判明している。

今回、この地に坂都１号線の道路改良事業が計画され、遺跡が破壊される恐れが生じた。そのため、原因者である坂城町建設課（当時は都市・下水課）と遺跡の保護措置について協議を行ったところ、試掘調査を実施して遺跡の状況を確認することとなり、平成18年８月17日から試掘調査を実施した。開発対象地に６箇所のトレンチを設定して遺構・遺物の確認を行った結果、３箇所のトレンチで遺構・遺物が検出された。遺構は開発対象地の中央付近に集中する傾向が見えた。この結果を基に再度協議した結果、道路拡幅部分に関しては発掘調査を実施し、遺跡を記録保存することとなった。



第１図　町横尾遺跡Ⅱ位置図（１：25,000）

第2節　調査の構成

発掘調査体制

調査担当者　助川　朋広（坂城町教育委員会学芸員）、時信　武史（坂城町教育委員会学芸員）

調査補助員　朝倉妙子、天田澄子、坂巻ケン子、萩野れい子（以上、町臨時職員）

調査協力員　上原邦夫、太田武夫、佐藤司、竹内佳男、千野正彦、塚田義勝、柳原喜仲、（以上、更埴地域シルバー人材センター）

整理調査体制

調査担当者　助川　朋広（前出）、時信　武史（前出）

調査補助員　朝倉妙子、天田澄子、坂巻ケン子、田中浩江、萩野れい子（以上、町臨時職員）

調査協力員　荒川園子、三井重子、滝沢かつ子、塚田智子（以上、更埴地域シルバー人材センター）

（事務局）

教育長　柳澤　哲（～平成19年5月31日）

教育長　長谷川　臣（平成19年6月1日～）

教育文化課長　西沢　悦子（平成19年4月1日～）

文化財係長　助川　朋広

文化財係　時信　武史

朝倉妙子、天田澄子、坂巻ケン子、田中浩江、千野美樹、中沢あつみ、萩野れい子（以上、町臨時職員）

第3節　調査日誌

試掘調査・発掘調査

平成18年8月17日　試掘調査開始。

8月18日　試掘調査終了。

平成19年6月5日　発掘調査開始。重機による表土剥ぎ開始。

平成19年6月11日　表土剥ぎ終了。遺構検出開始。

平成19年6月13日　遺構掘り下げ開始。

平成19年7月22日　現地説明会開催、約60名参加。

平成19年7月27日　遺構掘り下げ終了。

平成19年7月24日　遺構実測終了。

平成19年7月25日　航空写真撮影。

平成19年8月7日　埋め戻し開始。

平成19年8月9日　埋め戻し終了。

平成19年度中整理作業及び報告書作成。

第Ⅱ章　遺跡の立地と環境

第１節　地理的環境

坂城町は北信地方と東信地方の接触点にあたり、善光寺平を構成する更埴地方の最南端に位置する。町の地形は、中央部を貫流する千曲川の氾濫によって形成された氾濫原と、千曲川に流れ込む小河川がつくりだした扇状地によって形づくられた小盆地（坂城盆地）に特徴がある。町の北から東にかけては五里ヶ峰・大峰山・虚空蔵山をはじめとする標高1100～1300m前後の山々が連続し、千曲市・上田市との市町村界を形成し、西は大林山、三ツ頭山などの標高1000m前後の山々が連続し、千曲市・上田市との市町村界となっている。南は千曲川右岸の岩鼻と左岸の半過の岩鼻が狭隘な地形を形成し、上田盆地と隔てられている。このような地形から、古来よりこの地域は千曲川流域の要衝の地として注目されてきた。

この地域の気候は、南北に開けた小盆地状をなしていることから、季節風の影響を受けやすいため、夏季は南風、冬季は北風が強い。また、盆地状になっていることから寒暖の差が大きい。降水量は少なく、日本で最も雨量の少ない地域の一つとされている。現在では、この気候も関連し、工業が主要な産業となっており、農業では、りんご・バラ・ぶどうの栽培が盛んである。

第２節　歴史的環境

ここで、坂城町の各時期について代表的な遺跡を挙げながら、町の歴史的環境について概略的にふれておきたい。（括弧内の数字は５、６ページの坂城町遺跡分布図における遺跡番号を示す）

坂城町で最古の遺物は、約14,000～15,000年前の後期旧石器時代の上ヶ屋型彫刻器とされる石器である。この石器は南条地区の保地遺跡（3-1）より採集されたものであるが、本出土品以外には込山Ｄ遺跡に槍先型尖頭器の出土があるが、詳細は不明である。

縄文時代の遺構・遺物では早期押型文系の土器が坂城地区の和平Ａ遺跡や平沢遺跡で採集されている。また、平成12年度に発掘調査が実施された坂城地区の込山Ｃ遺跡（30-3）からも押型文系の土器片が少量出土しているが、これらは現在整理中である。この他に縄文時代前期・中期の土器も出土している。後期・晩期では、学史的にも有名な保地遺跡が挙げられる。保地遺跡は昭和40年度と平成11年度に発掘調査が実施されている。前者は縄文時代後期後半から晩期後半までの土器・石器群と、後期後半に属するとされる特殊儀礼的遺構の検出が『考古学雑誌』に報告されている（関1966）。後者については、縄文時代晩期に位置づけられる再葬墓が検出されており、中でも約19個体分の人骨が埋葬された２号墓址が注目される。その他、坂城地区の込山Ｄ遺跡（30-4）から昭和初期に採集された遮光器土偶の頭部がある。

弥生時代では、中期以前の調査例がないため状況は不明である。後期後半では、平成５年度に南条地区の塚田遺跡（1-7）で発掘調査が実施され、この時期に属する竪穴住居址36棟をはじめとする遺構が検出され、土器、石器、土製品、及び鉄製品が出土している。

古墳時代では、前期古墳は確認されていないが、中期古墳には中之条地区の仮称東平１号墳・２号墳が挙げられる（註１）。これらは、平成５年度に実施された上信越自動車道建設に伴う発掘調査で、埴輪や土器などの出土品から、１号墳は５世紀第２四半期後半、２号墳は５世紀第２四半期前半に位置づけられた（若林1999）。後期古墳では、町内でいくつかの古墳群の存在が知られているが、中でも代表的なものは村上地区の福沢古墳群小野沢支群に属する御厨社古墳である。埋葬施設に千曲川水系最大級の横穴式石室を持ち、

全長11.2mを測り、勾玉や切子玉、耳環などが出土している。古墳時代後期の集落址は町内においても多く検出され、特に現状に土器が配列された祭祀遺構が検出された南条地区の青木下遺跡Ⅱ（1-8）が注目される。奈良時代・平安時代の遺跡では、中之条地区の中之条遺跡群（8）とその周辺遺跡に多くの調査例があり、この地域における奈良・平安時代の状況が徐々に解明されつつある。具体的には、寺浦遺跡（8-1）、上町遺跡（8-2）、東町遺跡（8-3）、宮上遺跡（8-5）、北川原遺跡（8-6）、豊饒堂遺跡（20）、開畝遺跡（21）で調査が実施され、古墳時代後期後半～平安時代までの集落址が判明している。また、平安時代の生産遺跡として坂城地区の土井ノ入窯跡（32）があり、瓦の生産が行われていたことが判明し、本遺跡で生産された瓦は、現在の坂城小学校がある場所に8世紀末～9世紀頃に存在していたとされる込山廃寺（54）に用いられたほか、上田市信濃国分寺・国分尼寺、千曲市正法廃寺の補修用の差し瓦として使用されていたことが判明している。

平安時代後期、寛治8年（嘉保元）（1094）に村上地区に配流されてきた源盛清が後に村上氏として勢力を持つようになり、戦国時代には村上義清が活躍するようになった。義清の頃、村上氏の居館は現在の坂城地区の満泉寺一帯に所在したとされ、その背後にそびえる葛尾山の山頂には、義清が使用した葛尾城跡がある。このほか、中世の遺跡では坂城地区の観音平経塚（55）をはじめとする経塚と中之条地区の開畝製鉄遺跡（53）がある。観音平経塚は昭和54年と平成4年に調査が行われたが、平成4年の調査では、経塚の年代は14世紀第2四半期とされ、その周辺の五輪塔群の造営時期は14世紀第2四半期から16世紀前半頃に位置づけられている（若林1999）。開畝製鉄遺跡は、昭和52・53年に坂城町教育委員会によって学術調査が実施され、16世紀頃の製鉄炉址2基が確認されている。この調査は県内初の製鉄遺跡の学術調査として学史に位置づけられるものであった。

江戸時代に入ると、現在の坂城地区を主体とする坂本村、中之条地区を主体とする中之条村には幕府の代官所が置かれ、以後明治維新まで天領として支配された。このことから、この地域を重要視していたことが看取される。代官所は最初、坂本（61）に置かれたが、明和4年（1767）に焼失し、その後、安永8年（1797）には中之条に代官所が置かれるようになった。

以上、近世までの坂城町の歴史を概略した。

註1　周知の御堂川古墳群東平文群1号墳・2号墳とは異なる可能性があるため、仮称とされている。今後、正式な古墳名称の確定が必要である。

参考文献（五十音順・敬称略）

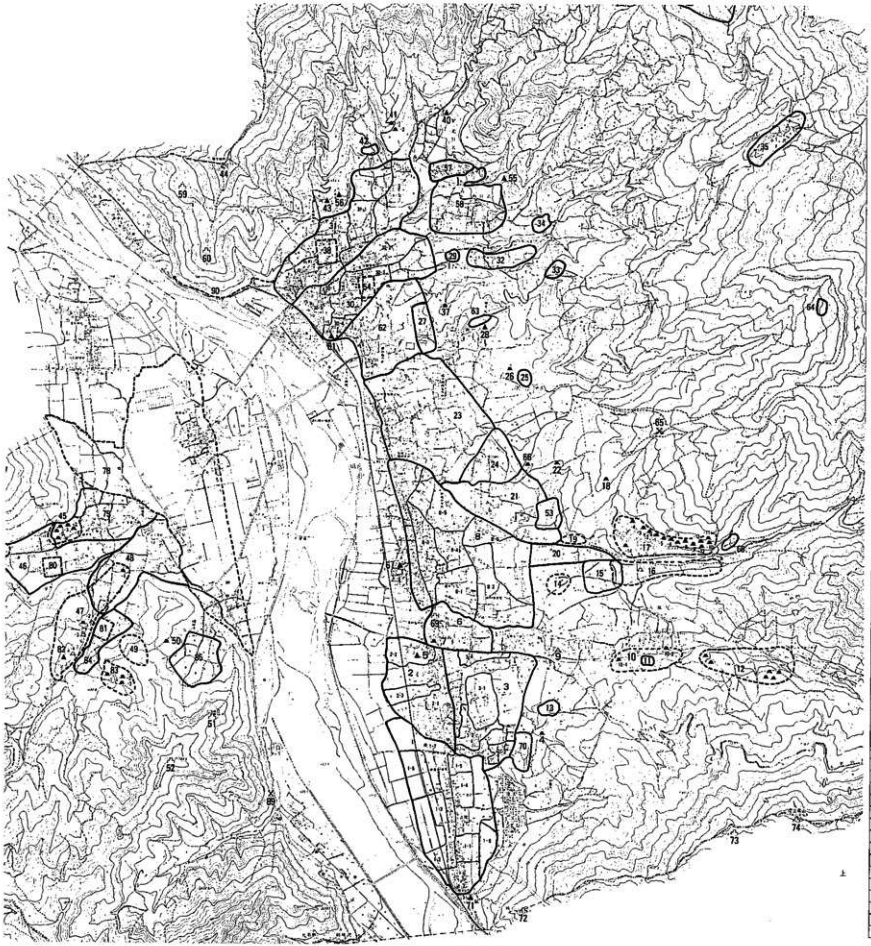
坂城町教育委員会　1978『開畝製鉄遺跡―第1次調査報告』 1979『開畝製鉄遺跡―第2次調査報告』 1993『宮上遺跡Ⅱ』 1995『東裏遺跡』 1996『豊饒堂遺跡・上町遺跡・寺裏遺跡・東町遺跡』 1996『寺浦遺跡Ⅱ』 2000『開畝遺跡Ⅲ』 2001『宮上遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ』 2002『保地遺跡Ⅱ』

岡　孝一　1966「長野県埴科郡保地遺跡発掘調査概報」『考古学雑誌』第51巻第3号

森嶋　稔ほか　1981『坂城町史』中巻　歴史編(一)

柳沢　亮　1998「第5節　開畝遺跡」『北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書2』(財)長野県埋蔵文化財センター

若林　卓　1999「第9章　東平古墳群」「第11章　観音平経塚」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書21』(財)長野県埋蔵文化財センター



坂城町遺跡分布図

図面番号	遺跡名	種別	時代
1	南条遺跡群	集落址	弥生～平安
−1	南条遺跡群　東眞遺跡	集落址	弥生～平安
−2	南条遺跡群　御殿眞遺跡（望原）	集落址	弥生～平安
−3	南条遺跡群　百々目利遺跡	集落址	弥生～平安
−4	南条遺跡群　中町遺跡（殿地）	集落址	弥生～平安
−5	南条遺跡群　細町遺跡	集落址	弥生～平安
−6	南条遺跡群　四ツ目遺跡	集落址	弥生～平安
−7	南条遺跡群　塚田遺跡（田舞）	集落址	弥生～平安
−8	南条遺跡群　百木下遺跡	水田址、祭祀跡	弥生～平安
2	金井西遺跡群	集落址	縄文～平安
−1	金井西遺跡群　金井遺跡	集落址	縄文～平安
−2	金井西遺跡群　社宮神遺跡（金井西）	集落址	縄文～平安
−3	金井西遺跡群　蓮水下遺跡	集落址	縄文～平安
3	金井東遺跡群	集落址	縄文～平安
−1	金井東遺跡群　保地遺跡	集落址	縄文～平安
−2	金井東遺跡群　山金井遺跡	集落址	縄文～平安
−3	金井東遺跡群　大木久保遺跡（南条小学校敷地）	集落址	縄文～平安
−4	金井東遺跡群　酒玉遺跡	集落址	縄文～平安
4	長ヶ谷古墳	古墳	古墳
5	社宮神経塚	経塚	中世
6	町殿城遺跡	散布地	縄文～平安
7	北畑古墳	古墳	古墳（後期）
8	中之条遺跡群	集落址	縄文～平安
−1	中之条遺跡群　寺浦遺跡	集落址	縄文～平安
−2	中之条遺跡群　上町遺跡	集落址	弥生～平安
−3	中之条遺跡群　東町遺跡	集落址	弥生～平安
−4	中之条遺跡群　北浦遺跡	集落址	縄文～平安
−5	中之条遺跡群　宮上遺跡	集落址	縄文～平安
−6	中之条遺跡群　北川原遺跡	集落址	縄文～平安
9	南条塚穴古墳（塚穴古墳）	古墳	古墳（後期）
10	谷川古墳群　入横尾支群　向田古墳	古墳	古墳（後期）
−1	谷川古墳群　入横尾支群　神輝古墳	古墳	古墳（後期）
−2	谷川古墳群　入横尾支群　入横尾古墳	古墳	古墳（後期）
11	入横尾遺跡	散布地	平安
12	谷川古墳群　上原支群	古墳	古墳（後期）
13	前原墓群	墳墓	中世～近世
14	御堂川古墳群　山口支群	古墳	古墳（後期）
15	山崎遺跡	散布地	縄文
16	御堂川古墳群　山崎支群	古墳	古墳（後期）
17	御堂川古墳群　前山支群	古墳	古墳（後期）
−1	御堂川古墳群　前山1号墳	古墳	古墳（後期）
−2	御堂川古墳群　前山2号墳	古墳	古墳（後期）
−3	御堂川古墳群　前山3号墳	古墳	古墳（後期）
−4	御堂川古墳群　前山4号墳	古墳	古墳（後期）
−5	御堂川古墳群　前山5号墳	古墳	古墳（後期）
−6	御堂川古墳群　前山6号墳	古墳	古墳（後期）
−7	御堂川古墳群　前山7号墳	古墳	古墳（後期）
−8	御堂川古墳群　前山8号墳	古墳	古墳（後期）
−9	御堂川古墳群　前山9号墳	古墳	古墳（後期）
−10	御堂川古墳群　前山10号墳	古墳	古墳（後期）
−11	御堂川古墳群　前山11号墳	古墳	古墳（後期）
−12	御堂川古墳群　前山12号墳	古墳	古墳（後期）
−13	御堂川古墳群　前山13号墳	古墳	古墳（後期）
−14	御堂川古墳群　前山14号墳	古墳	古墳（後期）
18	御堂川古墳群　東平支群　二塚古墳	古墳	古墳（後期）
19	御堂川古墳群　山田支群	古墳	古墳（後期）
20	登録堂遺跡（山崎北遺跡）	集落址	縄文～弥生
21	開殿遺跡	集落址	弥生～平安
22	人塚古墳	古墳	古墳（後期）
23	四ツ屋遺跡群	集落址	縄文～平安
24	成久保遺跡	集落址	古墳～平安
25	入田遺跡	散布地	弥生～平安
26	塚内古墳（御所沢古墳）	古墳	古墳（後期）
27	金比羅山遺跡	散布地	縄文～平安
28	篠平経塚	経塚	中世
29	陶の原遺跡	窯跡	平安
30	込山遺跡群	集落址	縄文～平安
−1	込山遺跡群　込山A遺跡（水上）	集落址	縄文～平安
−2	込山遺跡群　込山B遺跡（社宮神）	集落址	縄文～平安
−3	込山遺跡群　込山C遺跡（込山）	集落址	縄文～平安
−4	込山遺跡群　込山D遺跡（横町）	集落址	縄文～平安
−5	込山遺跡群　込山E遺跡（立町）	集落址	縄文～平安
31	日名沢遺跡群	集落址	弥生～平安
−1	日名沢遺跡群　日名沢遺跡	集落址	弥生～平安
−2	日名沢遺跡群　丸山遺跡	集落址	弥生～平安
32	土井ノ入窯跡	窯跡	奈良～平安
33	平林遺跡	散布地	縄文

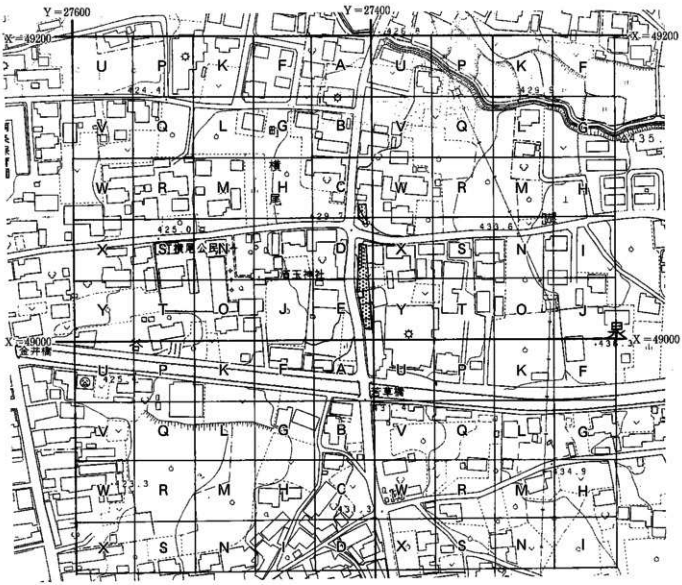
図面番号	遺跡名	種別	時代
34	塩外窯跡	窯跡	平安
35	平沢遺跡	散布地	縄文
36	和平遺跡群	集落址、散布地	縄文～平安
−1	和平遺跡群　和平A遺跡	集落址	縄文～平安
−2	和平遺跡群　和平B遺跡	散布地	弥生
−3	和平遺跡群　和平C遺跡	散布地	平安
37	上北屋山古墳	古墳	古墳（後期）
38	村上氏館跡	城館跡	中世
39	氏の原遺跡	散布地	縄文
40	北日名経塚	経塚	中世
41	北日名塚穴古墳群	古墳	古墳（後期）
−1	北日名塚穴1号墳	古墳	古墳（後期）
−2	北日名塚穴2号墳	古墳	古墳（後期）
42	梅ノ木遺跡	散布地	縄文
43	雷抜遺跡	窯跡	奈良
44	根尾城跡	城館跡	中世
45	出浦沢古墳群	古墳	古墳（後期）
−1	出浦沢古墳群　出浦支群1号墳	古墳	古墳（後期）
−2	出浦沢古墳群　出浦支群2号墳	古墳	古墳（後期）
−3	出浦沢古墳群　出浦支群3号墳	古墳	古墳（後期）
−4	出浦沢古墳群　出浦支群4号墳	古墳	古墳（後期）
−5	出浦沢古墳群　出浦支群5号墳	古墳	古墳（後期）
−6	出浦沢古墳群　鳥支群1号墳	古墳	古墳（後期）
−7	出浦沢古墳群　鳥支群2号墳	古墳	古墳（後期）
46	鳥遺跡	集落址	弥生～平安
47	福沢古墳群	古墳	古墳（後期）
−1	福沢古墳群　小野沢支群1号墳（御嶽社古墳）	古墳	古墳（後期）
−2	福沢古墳群　小野沢支群2号墳	古墳	古墳（後期）
−3	福沢古墳群　小野沢支群3号墳（ヤックラ古墳）	古墳	古墳（後期）
−4	福沢古墳群　小野沢支群4号墳	古墳	古墳（後期）
48	小野沢遺跡	集落址	弥生～平安
49	福沢古墳群　越堂支群	古墳	古墳（後期）
50	鎧泉寺黄古墳	古墳	古墳（後期）
51	築落城跡	城館跡	中世
52	三木城跡	城館跡	中世
53	開拓製鉄遺跡	製鉄跡	中世
54	法山廃寺跡	寺院跡	平安
55	鶴舞平経塚	経塚	中世
56	愛宕山鉄遺跡	製鉄跡	中世
57	塩之原遺跡	集落址	奈良～平安
58	南目名遺跡	集落址	弥生～平安
59	西尾城跡小足跡	城館跡	中世
60	藤城跡	城館跡	中世
61	坂木代官所跡	足軽跡	近世
62	田町遺跡群	散布地	古墳～平安
63	御所沢墳墓群	墳墓	中世
64	雲平窯跡	窯跡	平安
65	中之条代官所跡	陣屋跡	近世
66	坂沢古墳	古墳	古墳（後期）
67	中之条代官所跡	屋敷跡	近世
68	鳴崎窯跡	窯跡	平安
69	鎧倉城城跡	城館跡	中世
70	南町の河道跡（吉祥寺跡）	散布地・寺院跡	奈良～中世
71	口留番所跡	足軽跡	近世
72	和合城跡	城館跡	中世
73	高ヶ平城跡	城館跡	中世
74	虚空蔵山城跡	城館跡	中世
75	地獄沢清水鉱採掘跡	採掘跡	近世
76	鎧岩遺跡	散布地	平安
77	出浦城跡	城館跡	中世
78	上五明赤屋水田址	水田址	平安～近世
79	出浦遺跡	集落址	縄文～平安
80	村上氏館跡	城館跡	中世
81	福沢氏屋敷跡	城館跡	中世
82	小野沢窯跡	窯跡	奈良～平安
83	福沢古墳群　五枝支群1号墳	古墳	古墳（後期）
−1	福沢古墳群　五枝支群2号墳	古墳	古墳（後期）
−2	福沢古墳群　五枝支群3号墳	古墳	古墳（後期）
−3	福沢古墳群　五枝支群4号墳	古墳	古墳（後期）
84	荒堀遺跡	集落址	縄文～平安
85	網田原遺跡	集落址	縄文～平安
86	祭祀跡	祭祀跡	平安
87	高良銅鉱採掘跡	採掘跡	近代
88	高マンガン鉱採掘跡	採掘跡	近代
89	上平黄銅鉱採掘跡	採掘跡	近代
90	横尾北四面遺跡	側溝跡	近世

第Ⅲ章　調査の概要

第１節　調査の方法

本遺跡の調査では、調査区の遺構・遺物の正確な位置を記録でき、なお、将来的に周辺で実施される遺跡の発掘調査での遺構・遺物の調査にも整合できるように、平成14年４月施行の世界測地系2000の座標軸を基にグリッドを組んだ。

グリッドについては、200m×200mの大グリッドを設け区画を行い、その中を40m×40mに25等分した中グリッドを設定（第３図）し、北東端より「A・B・C…Y」区とアルファベットの大文字で命名した。本調査ではC・D・E区が発掘調査の対象グリッドである。また、その中グリッドを４m×４mの小グリッドで100区画に分割し、南北列を北から算用数字で「１・２・３…10」、東西列を東から五十音順で「あ・い・う…こ」と呼称することとした。例えば、その中の北東交点を「Oグリッド」というように命名し、調査に係るグリッドの呼称は例えば「Oあ１グリッド」とし、遺物の取り上げや遺構図の作成の基準とした。また、発掘調査における遺構の実測は、基本的に１／20を基準として簡易遣り方実測にて行った。

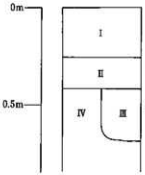


第３図　町横尾遺跡Ⅱ発掘調査区設定図（１：2,500）

第2節　基本層序

本調査区の基本層序は右図に柱状図を示したとおりである。Ⅰ層は砂礫を多く含むにぶい黄褐色土層で、耕作土である。Ⅱ層は褐色土層で、旧表土層である。Ⅲ層はいわゆる遺構の覆土となる。Ⅳ層は明黄褐色の砂礫層で、地山である。

以上が本調査区の基本層序であるが、調査区南部では過去に行われた攪乱や造成が直接地山面まで及んでいた。



第4図　基本層序模式図

第3節　検出された遺構・遺物

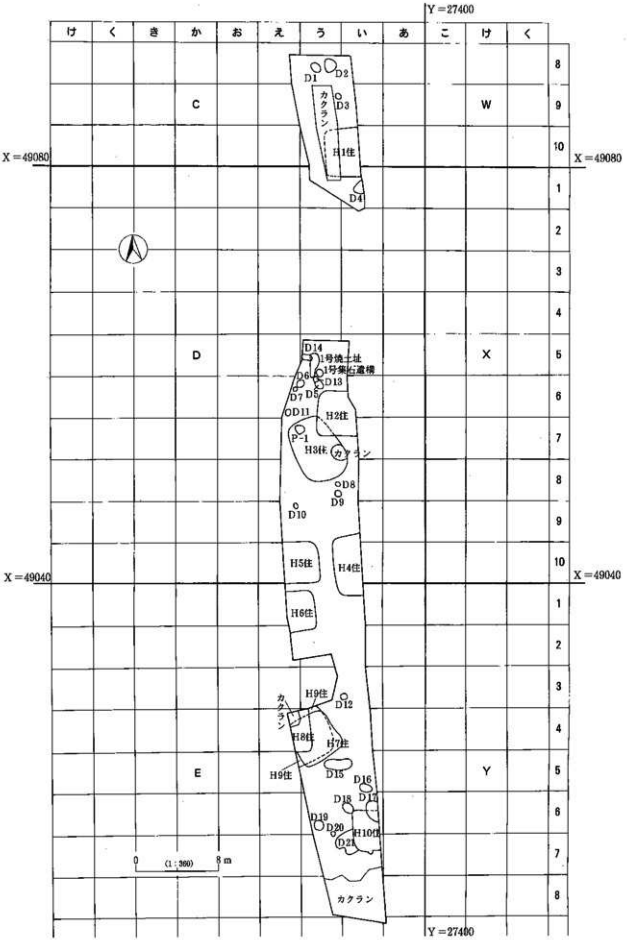
本調査によって検出された遺構・遺物は以下のとおりである。

遺構）

縄文時代	竪穴住居址	3棟
	土坑址	4基
弥生時代	竪穴住居址	1棟
	土坑址	1基
古墳時代	竪穴住居址	2棟
奈良・平安時代	竪穴住居址	4棟
中世	土坑址	1基
時期不明	土坑址	15基
	集石遺構	1基
	焼土址	1基

遺物）

縄文時代	土器・石器
弥生時代	土器・石器
古墳時代	土師器
奈良・平安時代	土師器・須恵器
中世	古銭



第５図　町横尾遺跡Ⅱ遺構配置図

第Ⅳ章　調査の結果

第１節　竪穴住居址

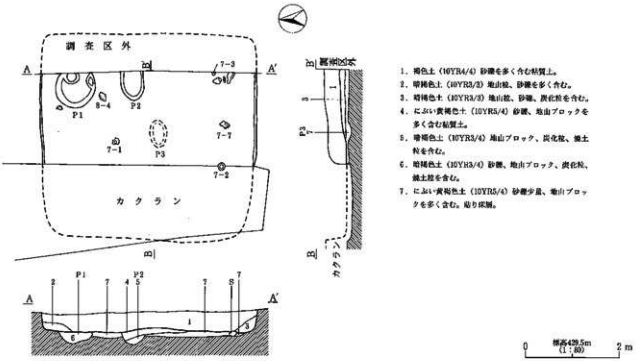
（１）Ｈ１号住居址

遺　構（第６図）

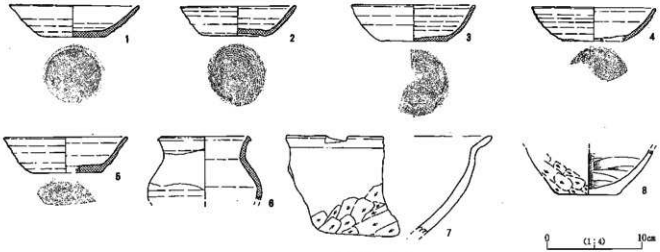
検出位置：Ｃい10、Ｃう10、Ｄい１、Ｄう１グリッド。**重複関係**：西側は攪乱を受ける。東側は調査区外未検出のため不明である。**平面形態**：調査区外など未検出であるが、概ね4.6m×4.6mの隅丸方形を呈するものと思われる。主軸方位はＮ―87°―Ｅを指す。**覆土**：暗褐色を基調とする土層が、緩やかなレンズ状堆積を呈していた。**カマド**：今回の調査では検出されなかった。東側の調査区外に所在するものと思われる。**床面の状況**：概ね平坦であった。地山を２段に掘り込んで、床土を敷きこんでいた。この床土は執拗なまでも叩き占められていた。掘り方の底面は地山砂礫層の礫が突出していた。**ピット**：床面及び掘り方底面において、複数のピットが確認された。用途などは判然としない。**遺物出土状況**：住居址の覆土上層からも少量は出土したが、ほとんどの遺物は中層以下からの出土であった。７－２は床面直上から出土した。**柱穴**：本住居址では主柱穴は確認できなかった。

遺　物（第７・８図、第１・４・５表）

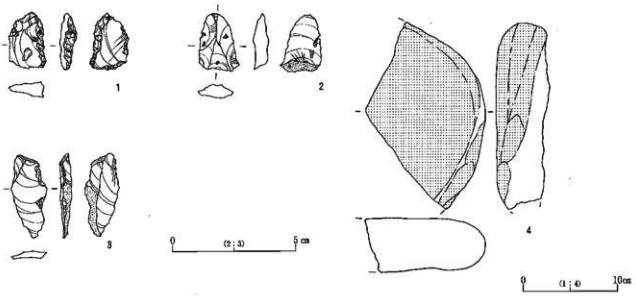
７－１～５は須恵器坏である。底部に明瞭な回転糸切り痕を残す。６は須恵器の壺である。７は土師器の鉢である。８は土師器の甕でヘラケズリが顕著である。８－１～３は黒曜石である。１は石鏃の未製品である。２は石鏃の素材である。３は再加工痕のみとめられる剥片である。４は磨石で、表面と下側面に広く磨滅痕が認められる。**時期**：出土遺物や住居址の形態から平安時代前半頃の所産と思われる。



第６図　Ｈ１号住居址実測図



第7図　H1号住居址出土土器実測図

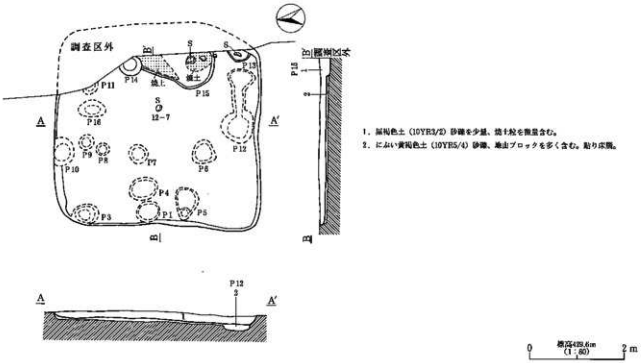


第8図　H1号住居址出土石器実測図

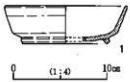
（2）H2号住居址

遺　構（第9図）

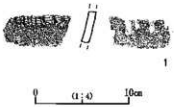
検出位置：Dい6、Dう6、Dい7、Dう7グリッド。**重複関係**：東側が調査区外未検出のため不明である。**平面形態**：調査区外など未検出であるが、概ね4.3m×4.3mの隅丸方形を呈するものと思われる。主軸方位はN—90°—Eを指す。**覆土**：黒褐色・暗褐色を基調とする土層が、緩やかなレンズ状堆積を呈していた。**カマド**：今回の調査では検出されなかった。P15付近に炭化粒や焼土粒が多く見られることなどから、東側の調査区外に所在するものと思われる。**床面の状況**：概ね平坦であった。地山を掘り込んだ後に、厚さ数センチの床土を敷きこんでいた。**ピット**：床面及び掘り方底面において、複数のピットが確認された。用途などは判然としない。**遺物出土状況**：住居址の覆土上・中層からも少量は出土したが、ほとんどの遺物は下層からの出土であった。**柱穴**：本住居址では主柱穴は確認できなかった。



第9図　H２号住居址実測図



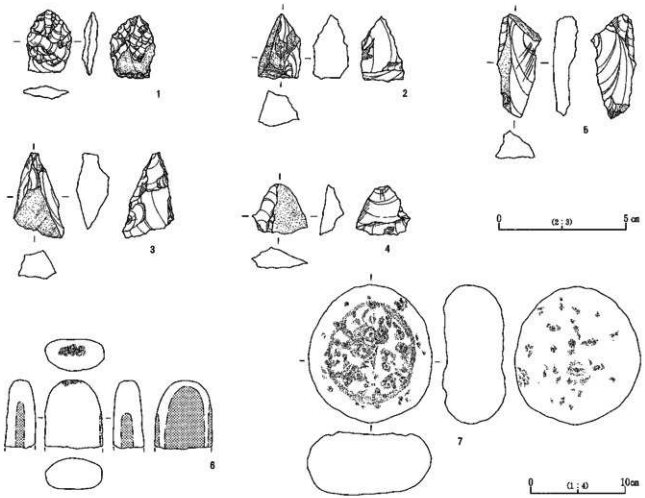
第10図　H２号住居址出土土器実測図



第11図　H２号住居址混入土器実測図

遺　物（第10・11・12図、第１・４・５表）

10-1は須恵器の坏で高台が貼付されている。11-1は縄文土器片で、斜位の櫛歯状刻みが施されている。12-1～5は黒耀石である。1は石鏃の未製品である。2～4は素材である。5は石錐の素材であろう。6は磨石ないしは凹石である。7は凹石で中央付近に顕著な敲打痕を残す。**時期**：出土遺物や住居址の形態から奈良時代頃の所産と思われる。



第12図　Ｈ２号住居址出土石器実測図

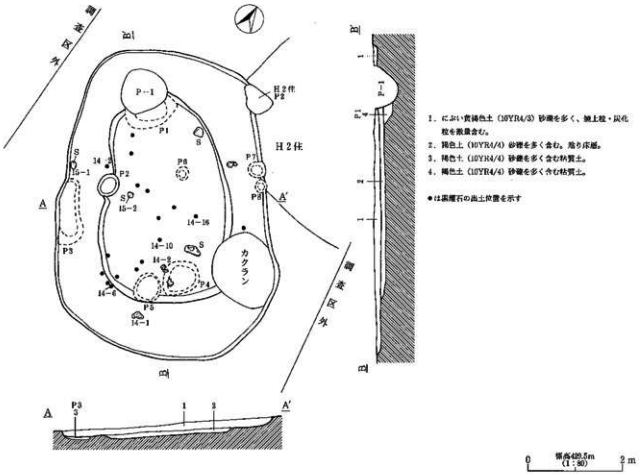
（３）Ｈ３号住居址

遺　構（第13図）

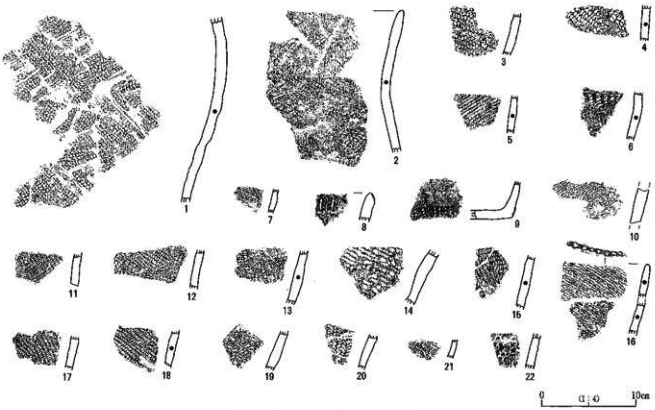
検出位置：Ｄい７、Ｄい８、Ｄう７、Ｄう８、Ｄえ７、Ｄえ８グリッド。**重複関係**：Ｈ２号住居址、Ｐ－１に切られ、東部に攪乱を受ける。**平面形態**：長軸約6.4m、短軸約4.5mの楕円形を呈している。主軸方位はＮ－29°－Ｗを指す。**覆土**：にぶい黄褐色を基調とする土層が堆積していた。**炉址**：今回の調査では検出されなかった。**床面の状況**：概ね平坦であった。地山を２段に掘り込んだ後に、厚さ数センチの床土を敷きこんでいた。**ピット**：床面及び掘り方底面において、複数のピットが確認された。用途などは判然としない。**遺物出土状況**：遺物のほとんどが下層～床面直上での出土であった。**柱穴**：本住居址では主柱穴は確認できなかった。

遺　物（第14・15・16・17・18図、第１・４・５・６表）

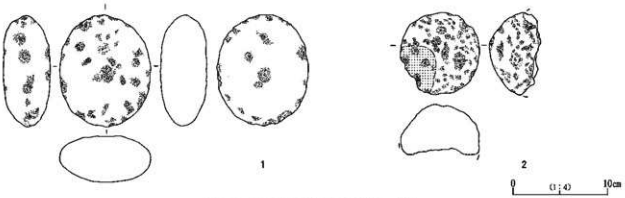
14－１～22は縄文土器の深鉢である。１・２は羽状縄文が施されている。16は口縁部で、外面には無節縄文が施されている。口唇部には刻目が施されている。３には異条縄文が施されている。５・14には無節縄文が施されている。19・20には組紐原体を施している。７には浅い櫛歯文が施されている。８は口縁部で、単沈線による連続刻み目を施している。６には櫛歯状工具による刻み目が施されている。９は底部で３本一組の櫛歯様工具による刺突文が施されている。21には単沈線による格子目文が施されている。22には押型文が施されている。15－１は凹石で表裏面に浅い敲打痕を残す。２は凹石で全面に顕著な敲打痕を残し、側面



第13図　Ｈ３号住居址実測図



第14図　Ｈ３号住居址出土土器実測図



第15図　Ｈ３号住居址出土石器実測図〈１〉

に磨滅痕を残す。16-１～18-17は黒耀石である。16-１～３は石核である。４は石錐の未製品が欠損したものである。５は石鏃である。16-６～17-７は石鏃の未製品で製作途中に欠損したものもある。８は再加工痕のみとめられる剥片である。17-９～18-17は素材である。**時期**：出土遺物や住居址の形態から縄文時代前期の所産と思われる。

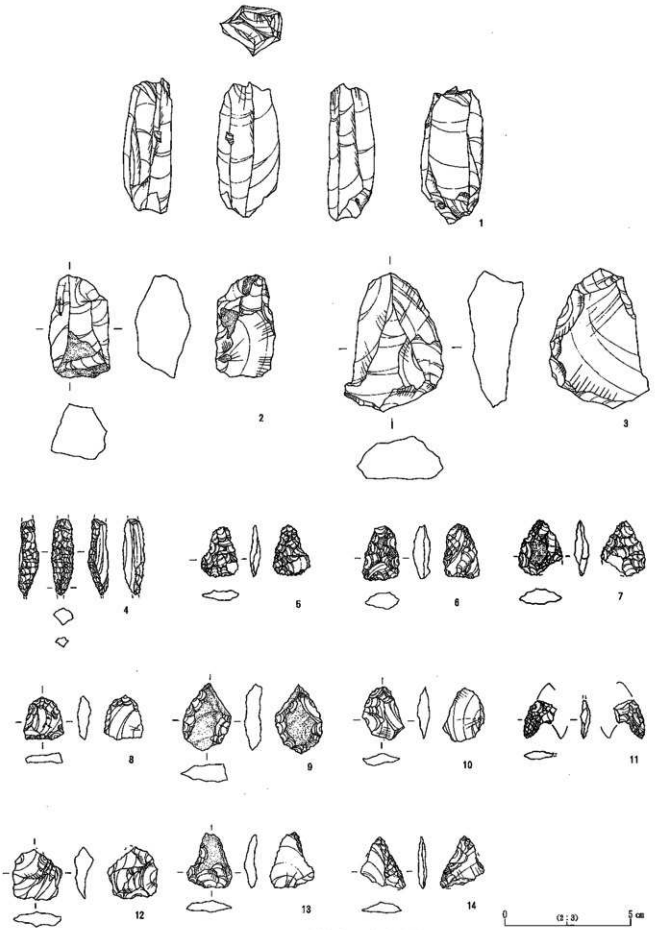
（４）Ｈ４号住居址

遺　構（第19図）

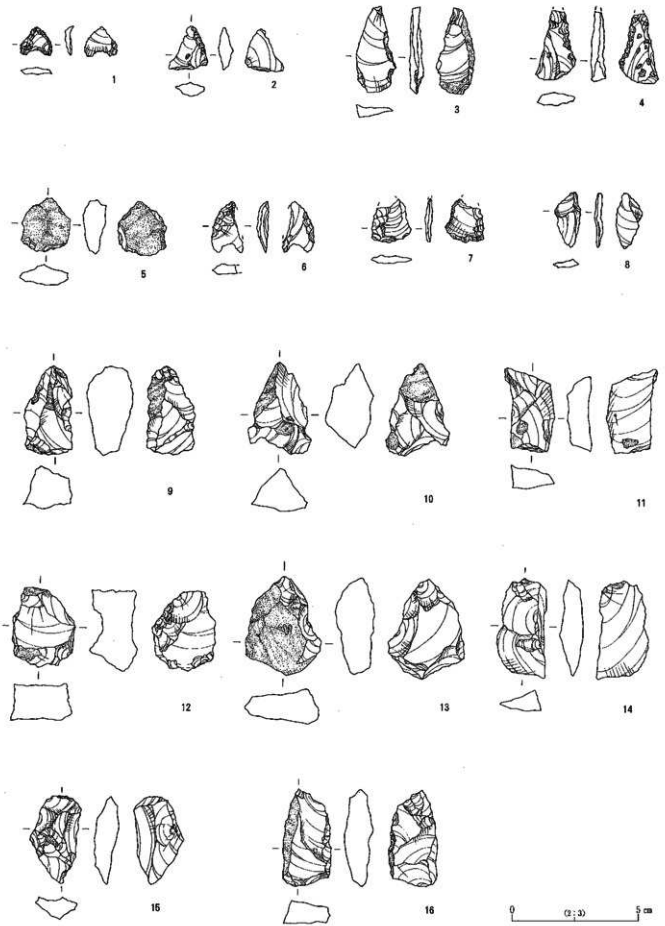
検出位置：Ｄい９、Ｄう９、Ｄい10、Ｄう10、Ｅい１、Ｅう１グリッド。**重複関係**：東側が調査区外未検出のため不明である。覆土中より縄文・弥生時代の遺物が多く出土していることから、調査区外において縄文・弥生時代の遺構と重複関係にあることも推知される。**平面形態**：調査区外未検出のため詳細は不明であるが、概ね６ｍ×６ｍの隅丸方形を呈するものと思われる。主軸方位はＮ－85°－Ｅを指す。**覆土**：暗褐色を基調とする土層が、緩やかなレンズ状堆積を呈していた。**カマド**：今回の調査では検出されなかった。東側の調査区外に所在するものと思われる。**床面の状況**：概ね平坦であった。地山を掘り込んだ後に、厚さ数センチの床土を敷きこんでいた。**ピット**：床面及び掘り方底面において、２基のピットが確認された。**遺物出土状況**：住居址の覆土上・中層からも少量は出土したが、ほとんどの遺物は下層からの出土であった。**柱穴**：本住居址では柱穴が２箇所確認された。残りの２箇所は調査区外の東側に所在しているものと思われる。断面形態は逆台形を呈しており、床面からの深さは約50cmであった。

遺　物（第20・21・22図、第１・２・４・６表）

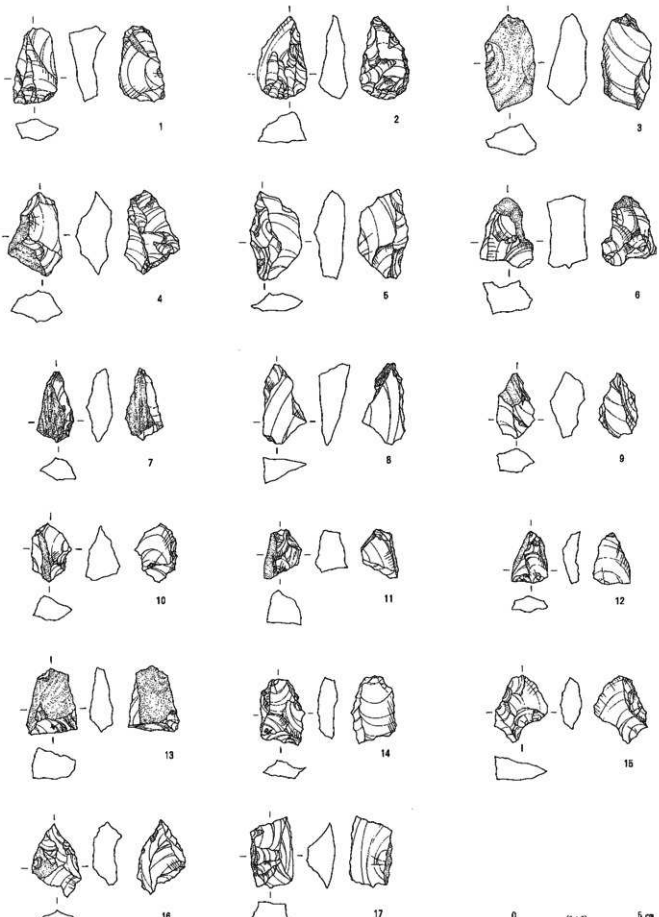
20-１～４は土師器甕である。１～３は底部に木葉痕を残す。21-１は縄文土器の深鉢の底部で、櫛歯状工具による連続刺突文が施されている。22-１は黒耀石の素材である。２は表裏面全体に粗い剥離調整を施して大型の石鏃様の形状を作出している。詳細な使用目的や製作時期は不明である。４は凹石で表裏面と側縁に弱い敲打痕を残す。５は磨石で表裏面に磨滅痕を残す。７・８は石皿で、大きな河原自然石の表面に深い凹面を持ち、若干の敲打痕を残す。**時期**：出土遺物や住居址の形態から古墳時代後期頃の所産と思われる。



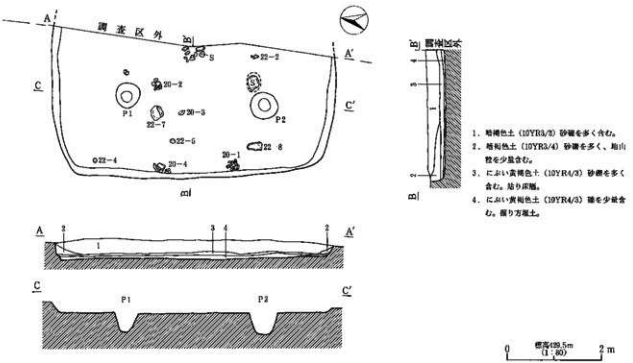
第16図　Ｈ３号住居址出土石器実測図〈２〉



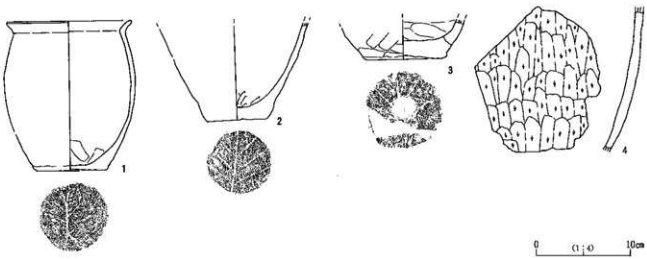
第17図　H３号住居址出土石器実測図〈３〉



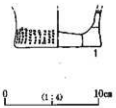
第18図　H 3 号住居址出土石器実測図〈4〉



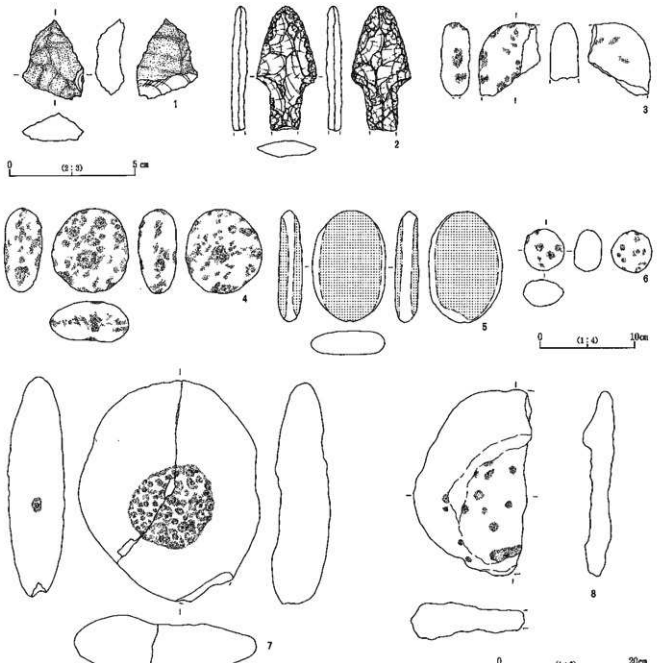
第19図　H４号住居址実測図



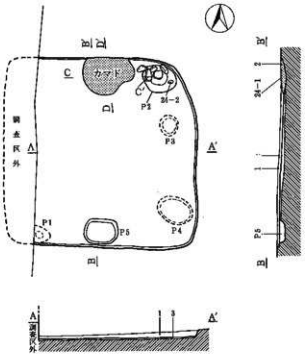
第20図　H４号住居址出土土師実測図



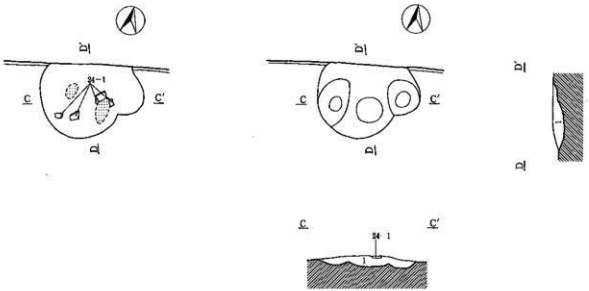
第21図　Ｈ４号住居址混入土器実測図



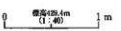
第22図　Ｈ４号住居址出土石器実測図



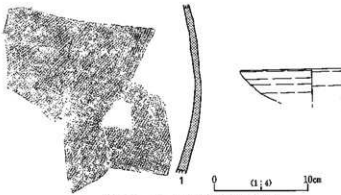
1. 黒褐色土（10YR3/2）砂礫を多く含む。
2. 明黄褐色土（10YR6/6）焼土粒を多く、炭化粒を少量含む。カマドの埋土。
3. にぶい黄褐色土（10YR5/4）砂礫を多く含む。貼り床層。



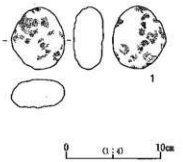
1. 明黄褐色土（10YR6/6）炭化粒・焼土粒・明黄褐色粘土ブロックを含む。カマドの落居層。



第23図　Ｈ５号住居址・カマド実測図



第24図　Ｈ５号住居址出土土器実測図



第25図　Ｈ５号住居址出土石器実測図

（５）Ｈ５号住居址

遺　構（第23図）

検出位置：Ｄう10、Ｄえ10グリッド。**重複関係**：西側が調査区外未検出のため不明である。**平面形態**：調査区外など未検出であるが、概ね４ｍ×４ｍの隅丸方形を呈するものと思われる。主軸方位はＮ―０°―Ｅを指す。**覆土**：黒褐色を基調とする土層が、緩やかな堆積を呈していた。**カマド**：住居址の北側中央付近から確認された。住居址自体の削平が進んでいたため、カマドも基礎部分しか残存しておらず、明確なソデ構造を確認することはできなかった。**床面の状況**：概ね平坦であった。地山を掘り込んだ後に、厚さ数センチの床土を敷きこんでいた。**ピット**：床面及び掘り方底面において、複数のピットが確認された。用途などは判然としない。カマドの東側のＰ２では、覆土中から径25cm程度の礫が検出されたがその意図するところは不明である。**遺物出土状況**：住居址の覆土上・中層からも少量は出土したが、ほとんどの遺物は下層～床面直上からの出土であった。**柱穴**：本住居址では主柱穴は確認できなかった。

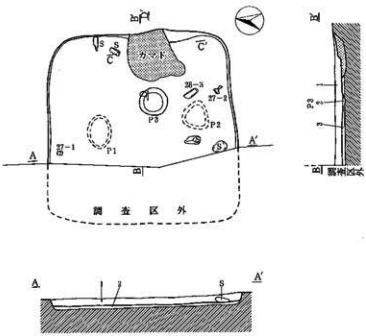
遺　物（第24・25図、第２・４表）

24-１は須恵器甕の脚部片である。２は土師器の坏である。25-１は敲石で表裏面に敲打痕を残す。**時期**：出土遺物や住居址の形態から平安時代の所産と思われる。

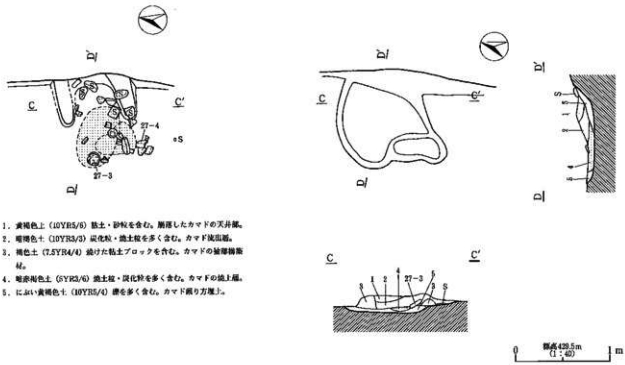
（６）Ｈ６号住居址

遺　構（第26図）

検出位置：Ｅう１、Ｅう２、Ｅえ１、Ｅえ２グリッド。**重複関係**：西側が調査区外未検出のため不明である。**平面形態**：調査区外など未検出であるが、概ね４ｍ×４ｍの隅丸方形を呈するものと思われる。主軸方位はＮ―83°―Ｅを指す。**覆土**：暗褐色を基調とする土層に覆われていた。**カマド**：住居址の北側から確認された。住居址自体の削平が進んでいたため、カマドも基礎部分しか残存しておらず、ソデの下部構造の一部が確認されたにすぎなかった。**床面の状況**：概ね平坦であった。地山を掘り込んだ後に、厚さ数センチの床土を敷きこんでいた。**ピット**：掘り方底面において、複数のピットが確認された。用途などは判然としない。**遺物出土状況**：住居址の覆土上・中層からも少量は出土したが、ほとんどの遺物は下層からの出土であった。床面からは被熱したと思しき板状の石材が出土した。（写真図版２）**柱穴**：本住居址では主柱穴は確認できなかった。

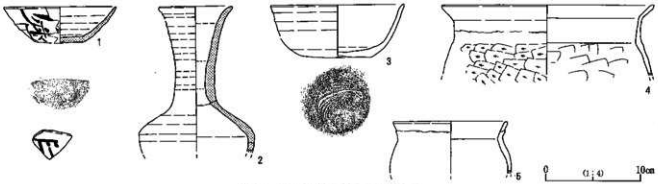


1. 暗褐色土（10YR3/3）層を含む。
2. にぶい黄褐色土（10YR6/4）地土粒・炭化粒を多く含む。カマドの堆積土層。
3. にぶい黄褐色土（10YR4/3）層を含む。踏り床層。

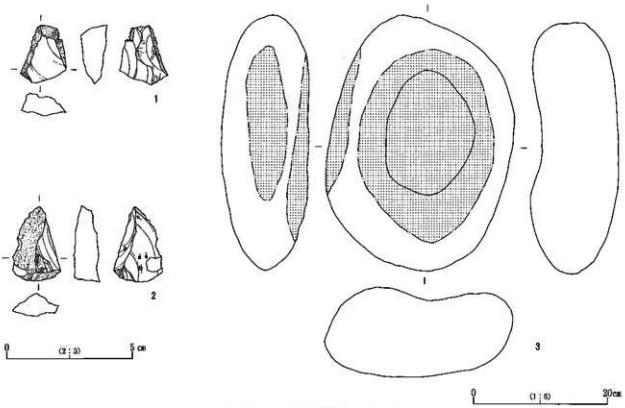


1. 黄褐色土（10YR5/6）地土・砂粒を含む。崩落したカマドの天井部。
2. 暗褐色土（10YR3/3）炭化粒・地土粒を多く含む。カマド埋土層。
3. 褐色土（7.5YR4/4）焼けた粘土ブロックを含む。カマドの被覆補強材。
4. 明赤褐色土（5YR3/6）地土粒・炭化粒を多く含む。カマドの地上部。
5. にぶい黄褐色土（10YR5/4）層を多く含む。カマド踏り方埋土。

第26図　Ｈ６号住居址・カマド実測図



第27図　Ｈ６号住居址出土土器実測図



第28図　Ｈ６号住居址出土石器実測図

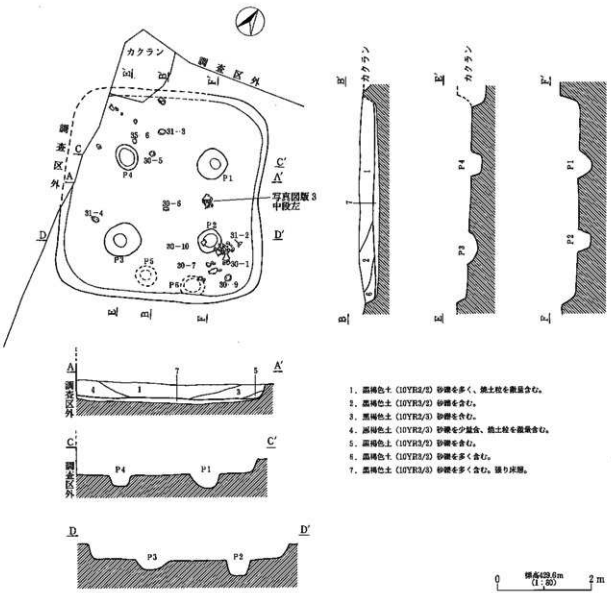
遺　物（第27・28図、第２・４・６表）

27-1は須恵器の坏である。坏部外面には墨書で「継」の文字が書かれている。この文字の上にも判然としない一文字があるので「□継」と読みとることができ、人名ではないかと思われる（平川南氏教示）。2は須恵器の長頸壺である。底部を欠損している。3は土師器坏である。口縁部は若干外窄しており底部は回転糸切り痕が顕著である。4は土師器の甕で、いわゆる武蔵型の甕である。口頸部が「コ」の字状を呈し、胴部にヘラケズリが施されている。5は土師器甕である。28-1・2は黒曜石の素材である。3は石皿である。硬く重い大きい川原自然礫の中央に磨滅使用に伴う顕著な凹面を持つ。**時期**：出土遺物や住居の形態から、平安時代前半頃の所産と考えられる。

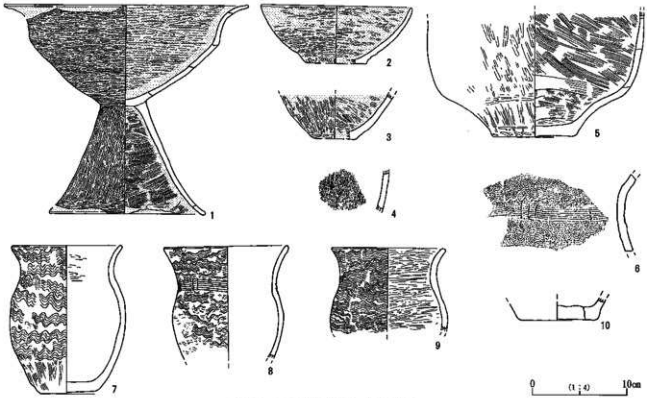
（7）Ｈ７号住居址

遺　構（第29図）

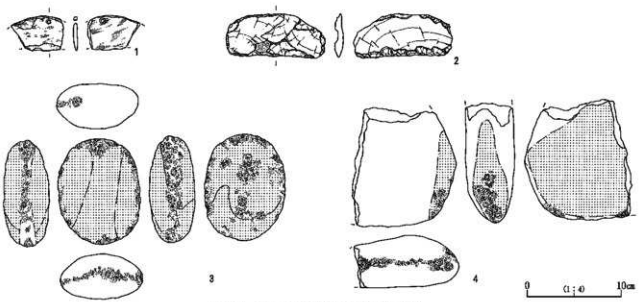
検出位置：Ｅう４、Ｅう５、Ｅえ４、Ｅえ５グリッド。**重複関係**：調査区北側に攪乱を受け、Ｈ８・９号住居址を切っている。その他は東側が調査区外未調査のため不明である。**平面形態**：長軸約4.5m、短軸約4.2mの隅丸方形を呈するものと思われる。主軸方位はＮ－32°－Ｗを指す。**覆土**：黒褐色を基調とする土層が、緩やかなレンズ状堆積を呈していた。**炉址**：今回の調査では検出されなかった。床面付近における焼土や炭化物の検出も見られなかった。**床面の状況**：概ね平坦であった。地山を掘り込んだ後に、厚さ数センチの床土を敷きこんでいた。**ピット**：床面及び掘り方底面において、６基のピットが確認された。**遺物出土状況**：住居址の覆土中から多くの遺物が出土したが、そのほとんどが下層からの出土であった。混入遺物の縄文土器は上層からも出土しているが、本住居址に伴う箱清水期の土器・石器類は下層～床面直上から、とりわけ床面直上からの出土が多かった。**柱穴**：本住居址では主柱穴が４箇所確認された。断面形態は逆台形を呈し、住居址床面からの深さは30cm程度であった。



第29図　Ｈ７号住居址実測図



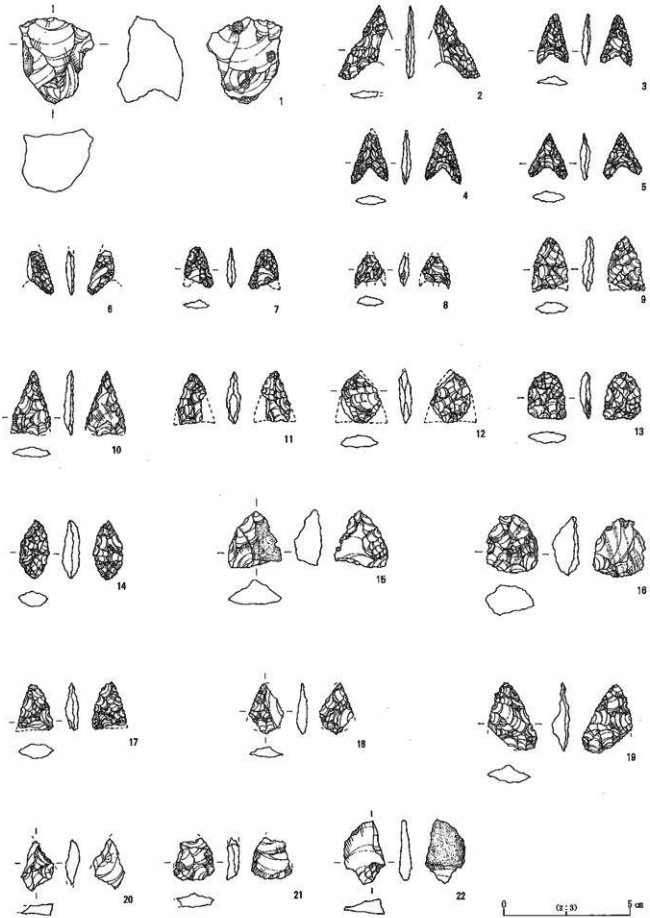
第30図　Ｈ７号住居址出土土器実測図



第31図　Ｈ７号住居址出土石器実測図〈１〉

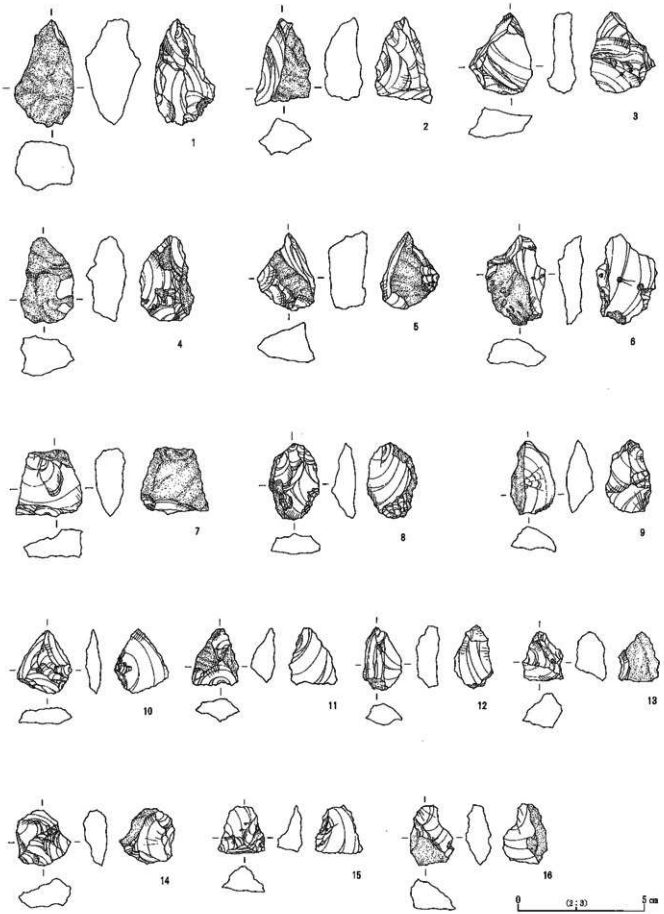
遺　物（第30・31・32・33・34・35図、第２・４・６・７表）

30-１～10は弥生土器である。１は高坏で丁寧なヘラミガキと赤色塗彩が施されている。２・３は鉢で横位あるいは縦位のヘラミガキと赤色塗彩が施されている。４は壺で細い単沈線による鋸歯文が施されている。５は壺の胴下半部である。６・８は壺で口縁部から胴部にかけて櫛描き波状文を施し、頸部には櫛描き簾状

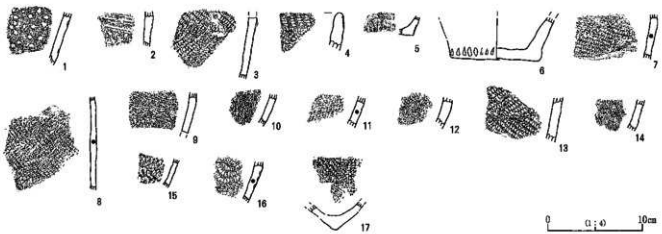


第32図　H７号住居址出土石器実測図〈２〉

第33図　H７号住居址出土石器実測図（３）



第34図　H７号住居址出土石器実測図〈４〉



第35図　Ｈ７号住居址混入土器実測図

文を施しているが、30-７・９は甕で口縁部から胴部にかけて櫛描き簾状文が施されない。10は甕の底部である。31-１は磨製の石包丁である。表裏面から穿孔され、表裏面ともに丁寧な研磨が施されている。２は石包丁の未成品である。表面は周縁よりの粗い剝離により調整され、裏面は主要剝離面に刃部調整を施している。３・４は磨石あるいは敲石である。磨滅痕と敲打痕を残す。32-１～33-９、33-11～34-16は黒曜石である。32-１は石核である。２～14は石鏃で、欠損したものも見られる。15・16は石鏃の未製品である。17～21は石鏃の未製欠損品である。32-22～33-９、34-１～16は素材である。33-10は石英製の石錐である。11は黒曜石製の石錐未製欠損品である。12・13は再加工痕のみとめられる剝片である。14・15はスクレイパーである。35-１～17は縄文土器片である。１は深鉢の胴部片で集合円形刺突文が施されている。２は半裁竹管による平行沈線文が施されている。３は深鉢の胴部片でＬＲ縄文による結節羽状縄文が施されている。４は櫛歯状工具による連続刺突文が施されている。５は底部片で櫛歯状工具による連続刺突文が施されている。６は底部片で連続刻目文が施されている。７・８は深鉢の胴部片でＲＬ縄文による結節羽状縄文が施されている。16は半裁竹管連続刺突文による同心円文が施されている。17は尖底土器の底部である。ＲＬ縄文が施されている。**時期**：出土遺物や住居址の形態から弥生時代後期後半の所産と思われる。

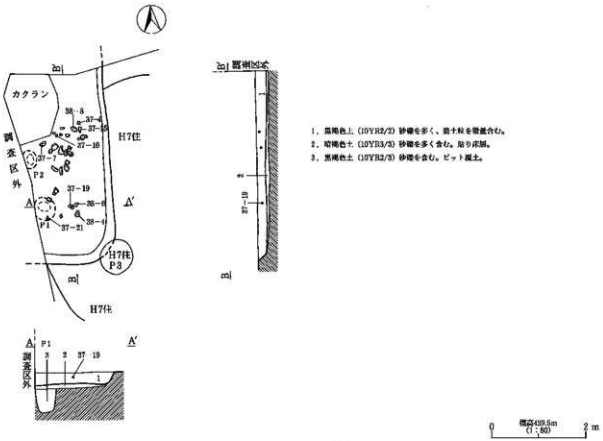
（８）Ｈ８号住居址

遺　構（第36図）

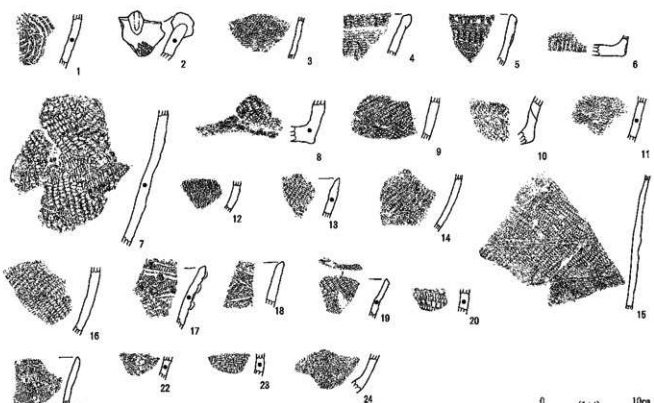
検出位置：Ｅう４、Ｅえ４グリッド。**重複関係**：住居址中央付近に攪乱を受け、Ｈ７号住居址に切られている。このほか詳細は北及び西側が調査区外未検出のため不明である。またＨ９号住居址とも重複関係にあるが、詳細は不明である。**平面形態**：調査区外未検出のため詳細は不明である。**主軸方位**はＮ－５°－Ｗを指すものと推定される。**覆土**：黒褐色を基調とする土層が堆積していた。**炉址**：今回の調査では検出されなかった。調査区外に所在しているものと思われる。**床面の状況**：概ね平坦であった。地山を掘り込んだ後に、厚さ数センチの床土を敷きこんでいた。**ピット**：掘り方底面において、複数のピットが確認された。用途などは判然としない。**遺物出土状況**：住居址の覆土上・中層からも出土したが、多くの遺物は下層からの出土であった。**柱穴**：本住居址では主柱穴は確認できなかった。

遺　物（第37・38・39・40図、第３・４・７・８表）

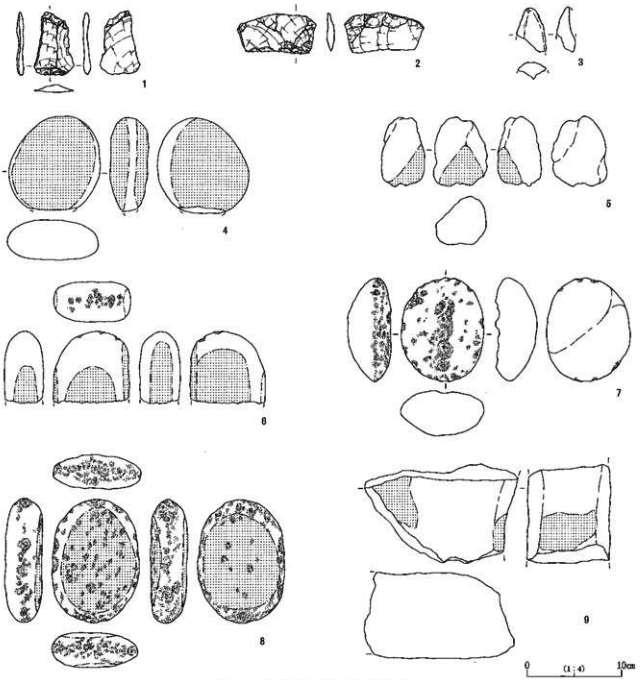
Ｈ７号住居址と切りあっているため弥生時代の遺物も多く出土している。37-１～24は縄文土器の深鉢である。１は半裁竹管による平行沈線文が施されている。２は口縁部で側面にはRL縄文が、口唇部には帯状



第36図　Ｈ８号住居址実測図

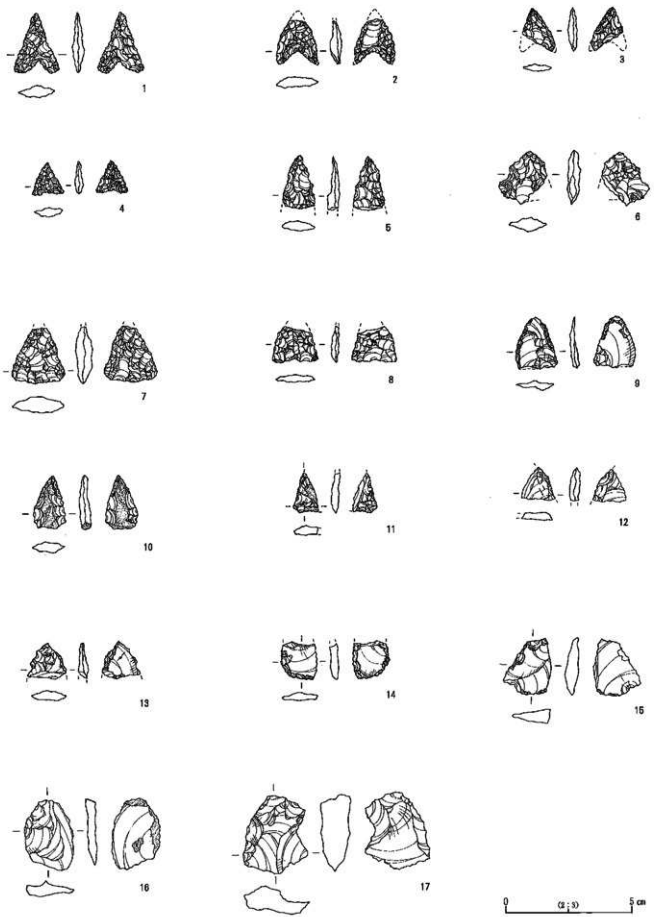


第37図　Ｈ８号住居址出土土器実測図

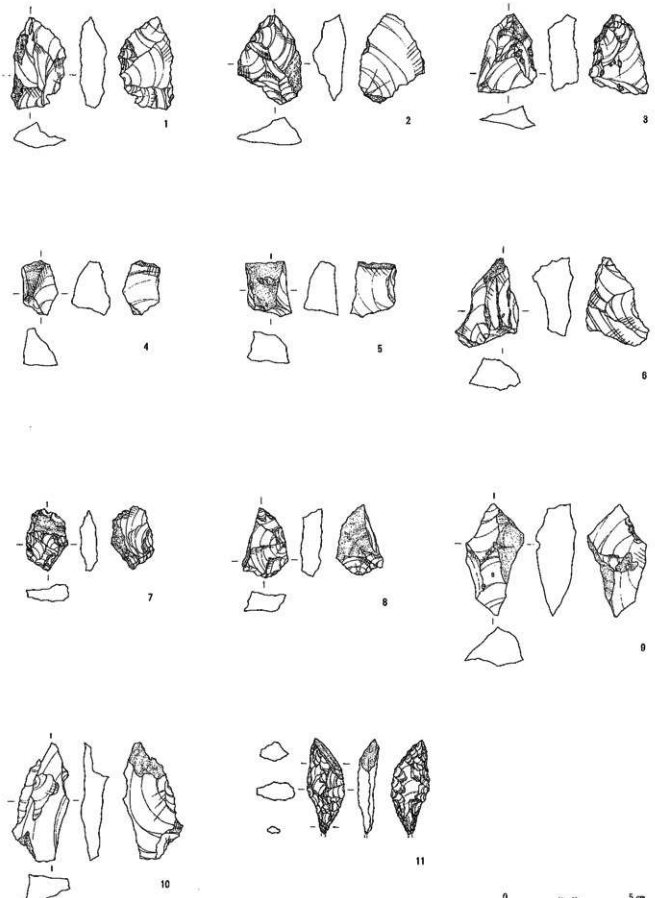


第38図　Ｈ８号住居址出土石器実測図〈１〉

貼付文が施されている。３・19は胴部片でＬＲ縄文による結節羽状縄文が施されている。４は折り返し口縁で櫛歯状工具よる連続刺突文が施されている。５は口縁部片で櫛歯状工具よる連続刺突文が施されている。６は底部片で連続刻み目文が施されている。７は胴部片でＲＬ縄文異原体による羽状縄文が施されている。８・10は底部片でＲＬ縄文端部閉束回転方向変換による羽状縄文が施されている。９・11は胴部片でＲＬ縄文端部閉束回転方向変換による羽状縄文が施されている。13は口縁部片でＲＬ縄文端部閉束回転方向変換による羽状縄文が施されている。14・16は胴部片で結束羽状縄文が施されている。15はＲＬ縄文端部多条結節による羽状縄文が施されている。17は口縁部片でＬＲ縄文を施した後に半裁竹管による連続刻み目文が施されている。20は胴部片でrl＋ＬＲの附加条縄文が施されている。18・21は絡条体回転施文であろうか。22は胴部片で半裁竹管によるコンパス文が施されている。23は組紐原体により施文されている。24は尖底土器で



第39図　Ｈ８号住居址出土石器実測図〈２〉



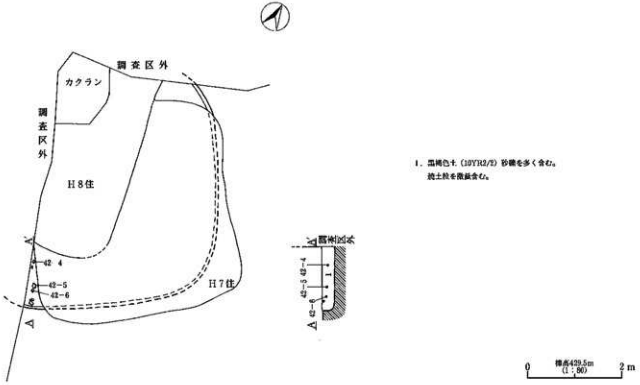
第40図　Ｈ８号住居址出土石器実測図〈３〉

ある。38-1は　打製石斧である。縦長剝片の表面に粗い剝離を施し、長辺に細かい剝離調整を施し、断面三角形を作出している。2は打製石包丁である。表裏面ともに周縁より粗い剝離により調整しているが、刃部の調整も粗く未製品の可能性がある。3と共にH7号住居址に所属するものであろう。3は硬い小型の亜角礫表面に細かい擦過痕を残す。4は磨石である。断面扁平の円礫を使用し、表裏面に広く磨滅痕を残す。5は磨石である。断面円形の拳大自然石の表面の一部に弱い磨滅痕を確認できる。6も礫石器である。断面扁平の円礫を使用し、表裏・側面に広く磨滅痕を残し、端部に敲打痕が確認できる。7は凹石で断面算盤球状の表面に深い敲打痕が残る。8は敲石である。断面扁平の円礫を使用し、表裏面及び側面に浅い敲打痕が確認できる。9は磨石である。硬い亜角礫の表面及び側面に磨滅による凹面を残す。据置きにより使用したものであろうか。39-1～40-11は黒耀石である。39-1～6、8・9は石鏃で欠損品も見られる。7、11～15は未製欠損品である。10、16・17は未製品である。40-1～10は素材である。11は石錐である。**時期**：出土遺物から縄文時代前期頃の所産と思われる。

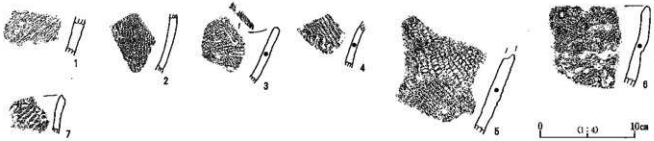
（9）H9号住居址

遺構（第41図）

検出位置：Eう4、Eう5、Eえ4、Eえ5グリッド。**重複関係**：北西側に攪乱を受け、H7号住居址に切られている。このほかH8号住居址とも重複関係にあるが、詳細は不明である。**平面形態**：調査区外未検出のため詳細は不明である。主軸方位はN—28°—Wを指すものと推定される。**覆土**：黒褐色を基調とする土



第41図　H9号住居址実測図

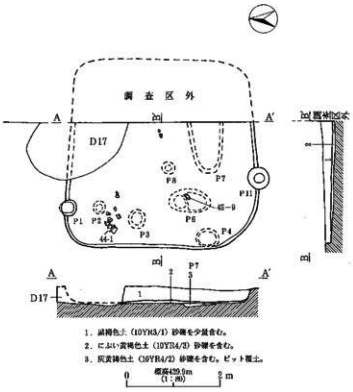


第42図　Ｈ９号住居址出土土器実測図

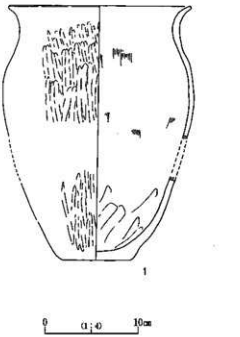
層が堆積していた。**炉址**：今回の調査では検出されなかった。**床面の状況**：概ね平坦であった。検出範囲が限られていたためか貼り床は確認されなかった。**ピット**：検出範囲が限られていたためかピットは確認されなかった。**遺物出土状況**：住居址の覆土から多くの縄文土器片が出土した。**柱穴**：本住居址では主柱穴は確認できなかった。

遺　物（第42図、第３表）

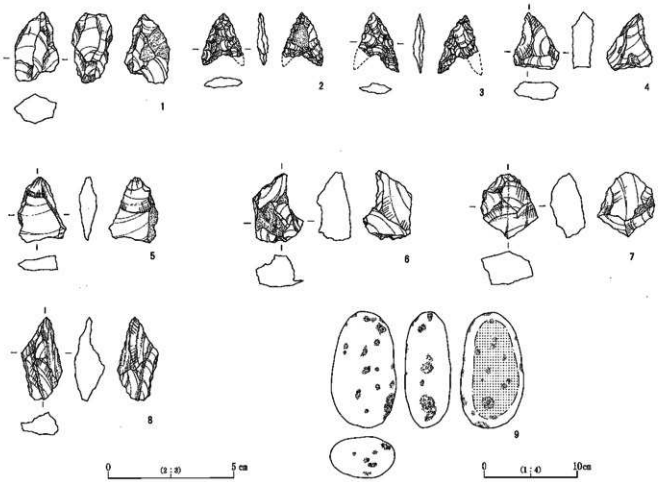
42−１～７は深鉢の破片である。３は口縁部で波状口縁である。ＲＬ縄文端部閉束回転方向変換による羽状縄文が施されている。４は胴部片で、ＲＬ縄文を施文した後に半裁竹管によるコンパス文が施されている。５は胴部片でＲＬ異原体による羽状縄文が施されている。６は口縁部で無節縄文による羽状縄文が施されている。７は押型文土器の口縁部である。**時期**：出土遺物から縄文時代前期頃の所産と思われる。



第43図　Ｈ10号住居址実測図



第44図　Ｈ10号住居址出土土器実測図



第45図　H10号住居址出土石器実測図

(10) H10号住居址

遺　構（第43図）

検出位置：Eい6、Eい7グリッド。**重複関係**：D17に切られる。このほか詳細は東側が調査区外未検出のため不明である。**平面形態**：調査区外など未検出であるが、概ね4.1m×4.1mの隅丸方形を呈するものと思われる。**主軸**方位はN—90°—Eを指す。**覆土**：黒褐色を基調とする土層が堆積していた。**カマド**：今回の調査では検出されなかった。東側の調査区外に所在するものと思われる。**床面の状況**：概ね平坦であった。地山を掘り込んだ後に、厚さ数センチの床土を敷きこんでいた。**ピット**：床面及び掘り方底面において、複数のピットが確認された。用途などは判然としない。**遺物出土状況**：住居址の覆土上・中層からも少量は出土したが、ほとんどの遺物は下層からの出土であった。**柱穴**：本住居址では主柱穴については判然としない。

遺　物（第44・45図、第3・4・8表）

44-1は土師器の甕で全体的にナデ調整が施されている。45-1～8は黒耀石である。2・3は石鏃であるが欠損している。1、4～8は素材である。45-9は敲石で、断面楕型の長楕円礫の表裏面および片側面に浅い敲打痕が確認できる。**時期**：出土遺物や住居址の形態から古墳時代後期頃の所産と思われる。

第2節　土坑址

（1）D1号土坑

遺　構（第46図）

検出位置：Cう8グリッド。**重複関係**：なし。**平面形態**：長軸約1.2m、短軸約0.8mの楕円形を呈し、主軸方位はN－51°－Eを指す。**断面形態**：皿状を呈し、検出面からの深さは12cmである。**覆土**：暗褐色土（10YR3/4）の単層であった。**遺物出土状況**：遺物は出土しなかった。**時期**：帰属時期は不明である。

（2）D2号土坑

遺　構（第46図）

検出位置：Cう8グリッド。**重複関係**：なし。**平面形態**：長軸約1.4m、短軸約1.1mの三角形を呈し、主軸方位はN－38°－Eを指す。**断面形態**：概ね逆台形を呈し、検出面からの深さは約40cmを測る。**覆土**：黒褐色土（10YR3/2）の単層であった。**遺物出土状況**：遺物は出土しなかった。**時期**：帰属時期は不明である。

（3）D3号土坑

遺　構（第46図）

検出位置：Cう9グリッド。**重複関係**：なし。**平面形態**：長軸約60cm、短軸約50cmの円形を呈する。**断面形態**：逆台形を呈し、検出面からの深さは25cmを測る。**覆土**：褐色（10YR4/4）の砂礫層の単層であった。**遺物出土状況**：遺物は出土しなかった。**時期**：帰属時期は不明である。

（4）D4号土坑

遺　構（第46図）

検出位置：Dい1グリッド。**重複関係**：調査区外未検出のため不明。**平面形態**：調査区外未検出のため不明。**断面形態**：箱形を呈し、検出面からの深さは約30cmを測る。**覆土**：黒褐色土（10YR3/2）の単層であった。**遺物出土状況**：遺物は出土しなかった。**時期**：帰属時期は不明である。

（5）D5号土坑

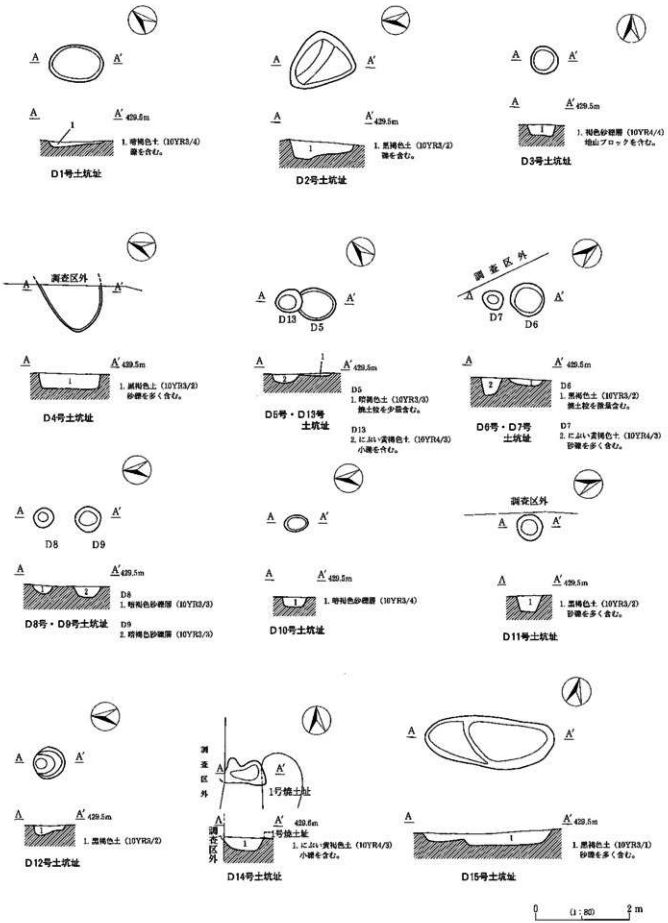
遺　構（第46図）

検出位置：Dう6グリッド。**重複関係**：D13に切られる。**平面形態**：長軸約80cm、短軸約70cmの円形を呈し、主軸方位はN－50°－Eを指す。**断面形態**：皿状を呈し、検出面からの深さは8cmである。**覆土**：暗褐色土（10YR3/3）の単層であった。**遺物出土状況**：遺物は出土しなかった。**時期**：帰属時期は不明である。

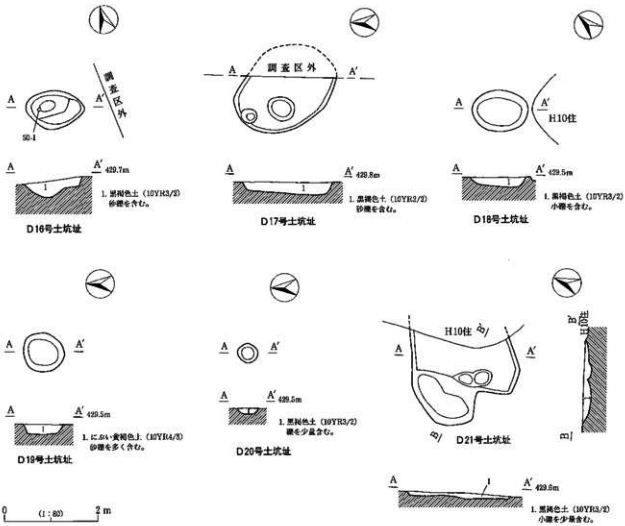
（6）D6号土坑

遺　構（第46図）

検出位置：Dう6、Dえ6グリッド。**重複関係**：なし。**平面形態**：径約70cmの円形を呈し、主軸方位はN－48°－Eを指す。**断面形態**：逆台形を呈し、検出面からの深さは15cmである。**覆土**：黒褐色土（10YR3/2）の単層であった。**遺物出土状況**：覆土中より数点の弥生土器片が出土した。**時期**：出土遺物から弥生時代後期の所産と考えられる。



第46図　土坑址実測図〈1〉



第47図　土坑址実測図（2）

（7）D7号土坑

遺　構（第46図）

検出位置：Dえ6グリッド。**重複関係**：なし。**平面形態**：径約40cmの円形を呈し、主軸方位はN－48°－Eを指す。**断面形態**：逆台形を呈し、検出面からの深さは35cmである。**覆土**：にぶい黄褐色土（10YR4/3）の単層であった。**遺物出土状況**：遺物は出土しなかった。**時期**：帰属時期は不明である。

（8）D8号土坑

遺　構（第46図）

検出位置：Dう8グリッド。**重複関係**：なし。**平面形態**：径約40cmの円形を呈し、主軸方位はN－3°－Eを指す。**断面形態**：やや深い皿状を呈し、検出面からの深さは15cmである。**覆土**：暗褐色土（10YR3/3）の単層であった。**遺物出土状況**：遺物は出土しなかった。**時期**：帰属時期は不明である。

（9）D9号土坑

遺　構（第46図）

検出位置：Dう8グリッド。**重複関係**：なし。**平面形態**：径約55cmの円形を呈し、主軸方位はN－3°－Eを指す。**断面形態**：逆台形を呈し、検出面からの深さは20cmである。**覆土**：暗褐色土（10YR3/3）の単層であった。**遺物出土状況**：遺物は出土しなかった。**時期**：帰属時期は不明である。

(10) D10号土坑

遺　構（第46図）

検出位置：Dえ9グリッド。**重複関係**：なし。**平面形態**：長軸約50cm、短軸約35cmの円形を呈し、主軸方位はN－0°－Eを指す。**断面形態**：逆台形を呈し、検出面からの深さは約20cmである。**覆土**：暗褐色土（10YR3/4）の単層であった。**遺物出土状況**：遺物は出土しなかった。**時期**：帰属時期は不明である。

(11) D11号土坑

遺　構（第46図）

検出位置：Dえ6グリッド。**重複関係**：なし。**平面形態**：径約55cmの円形を呈し、主軸方位はN－23°－Wを指す。**断面形態**：逆台形を呈し、検出面からの深さは約30cmである。**覆土**：黒褐色土（10YR3/2）の単層であった。**遺物出土状況**：遺物は出土しなかった。**時期**：帰属時期は不明である。

(12) D12号土坑

遺　構（第46図）

検出位置：Eい3、Eう3グリッド。**重複関係**：なし。**平面形態**：径約70cmの円形を呈し、主軸方位はN－0°－Wを指す。**断面形態**：逆台形を呈し、検出面からの深さは約20cmである。**覆土**：黒褐色土（10YR3/2）の単層であった。**遺物出土状況**：遺物は出土しなかった。**時期**：帰属時期は不明である。

(13) D13号土坑

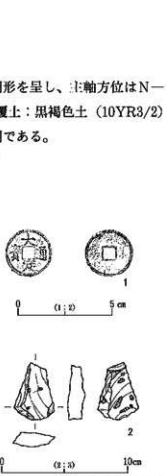
遺　構（第46図）

検出位置：Dう6グリッド。**重複関係**：D5を切る。**平面形態**：長軸約55cm、短軸約50cmの円形を呈し、主軸方位はN－50°－Eを指す。**断面形態**：皿状を呈し、検出面からの深さは約30cmである。**覆土**：にぶい黄褐色土（10YR4/3）の単層であった。**遺物出土状況**：遺物は出土しなかった。**時期**：帰属時期は不明である。

(14) D14号土坑

遺　構（第46図）

検出位置：Dう5グリッド。**重複関係**：1号焼土址を切っている。**調査区外未検出のため不明。平面形態**：調査区外未検出のため不明。**断面形態**：緩やかな逆台形を呈し、検出面からの深さは約25cmである。**覆土**：にぶい黄褐色土（10YR4/3）の単層であった。**遺物出土状況**：覆土中から古銭



第48図　D14号土坑址出土遺物実測図

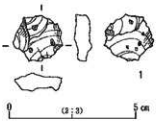
のほか縄文土器片などが数点出土した。

遺　物（第48図、第３・８表）48－１は大定通宝である。女真族建国の金で鋳造されたもので、1178年が初鋳年代である。表面は腐食しているが金属の遺存状況は良好である。２は黒耀石の素材である。**時期**：出土遺物から古代から中世にかけての所産であると思われる。

(15) D15号土坑

遺　構（第46図）

検出位置：Eい５、Eう５グリッド。**重複関係**：なし。**平面形態**：長軸約2.8m、短軸約1.5mの楕円形を呈し、主軸方位はN－86°－Eを指す。**断面形態**：２段に掘り込まれた逆台形を呈し、検出面からの深さは約40cmである。**覆土**：黒褐色土（10YR3/1）の単層であった。**遺物出土状況**：覆土中から縄文土器片が数点出土した。



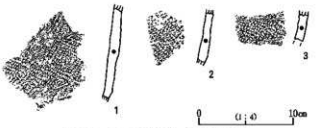
第49図　D15号土坑址出土遺物実測図

遺　物（第49図、第８表）49－１は黒耀石の素材である。**時期**：出土遺物から縄文時代前期の所産と考えられる。

(16) D16号土坑

遺　構（第47図）

検出位置：Eい５グリッド。**重複関係**：なし。**平面形態**：長軸約1.2m、短軸約0.9mの楕円形を呈し、主軸方位はN－73°－Wを指す。**断面形態**：やや深い皿状を呈し、検出面からの深さは約35cmである。**覆土**：黒褐色土（10YR3/2）の単層であった。**遺物出土状況**：覆土中から縄文土器片が数点出土した。



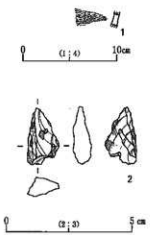
第50図　D16号土坑址出土遺物実測図

遺　物（第50図、第３表）50－１・３は深鉢の胴部片で結節羽状縄文が施されている。２は深鉢の胴部片で羽状縄文が施されている。**時期**：出土遺物から縄文時代前期の所産と考えられる。

(17) D17号土坑

遺　構（第47図）

検出位置：Eい６グリッド。**重複関係**：調査区外未検出のため不明。**平面形態**：調査区外未検出のため不明。**断面形態**：逆台形を呈し、検出面からの深さは約25cmである。**覆土**：黒褐色土（10YR2/2）の単層であった。**遺物出土状況**：覆土中から弥生土器が数点出土した。



第51図　D17号土坑址出土遺物実測図

遺　物（第51図、第３・８表）51－１は弥生時代の甕の胴部片で櫛描き波状文が施されている。２は黒耀石製石鏃の未製品である。**時期**：出土遺物から弥生時代後期以降の所産と考えられる。

(18) D18号土坑

遺　構（第47図）

検出位置：Eい6グリッド。**重複関係**：なし。**平面形態**：長軸約1.1m、短軸約0.9mの楕円形を呈し、主軸方位はN－41°－Wを指す。**断面形態**：皿状を呈し、検出面からの深さは約25cmである。**覆土**：黒褐色土（10YR 3/2）の単層であった。**遺物出土状況**：時期不明の土器片が数点出土した。

遺　物（第52図、第8表）52－1は再加工痕のみとめられる剝片である。

時期：帰属時期は不明である。

第52図　D18号土坑址出土遺物実測図

(19) D19号土坑

遺　構（第47図）

検出位置：Eう6グリッド。**重複関係**：なし。**平面形態**：長軸約90cm、短軸約80cmの楕円形を呈し、主軸方位はN－0°－Eを指す。**断面形態**：逆台形を呈し、検出面からの深さは約25cmである。**覆土**：にぶい黄褐色土（10YR4/3）の単層であった。**遺物出土状況**：時期不明の土器片が数点出土した。**時期**：帰属時期は不明である。

(20) D20号土坑

遺　構（第47図）

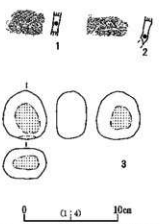
検出位置：Eう6グリッド。**重複関係**：なし。**平面形態**：径約40cmの円形を呈し、主軸方位はN－0°－Eを指す。**断面形態**：逆台形を呈し、検出面からの深さは約15cmである。**覆土**：黒褐色土（10YR3/2）の単層であった。**遺物出土状況**：遺物は出土しなかった。**時期**：帰属時期は不明である。

(21) D21号土坑

遺　構（第47図）

検出位置：Eい6、Eい7、Eう7グリッド。**重複関係**：H10号住居址に切られる。**平面形態**：H10号住居址に切られており不明である。**断面形態**：逆台形を呈し、検出面からの深さは12cmである。**覆土**：黒褐色土（10YR 3/2）の単層であった。**遺物出土状況**：覆土中から縄文土器が十数点出土した。

遺　物（第53図、第3・4表）53－1は深鉢の胴部片で羽状縄文が施されている。2は深鉢の胴部片でループ文が施されている。3は磨石で断面卵型の円礫の表裏面に広く磨滅痕が確認できる。**時期**：出土遺物から縄文時代前期の所産と考えられる。



第53図　D21号土坑址出土遺物実測図

第3節　その他の遺構

(1) 1号集石遺構

遺　構（第54図）

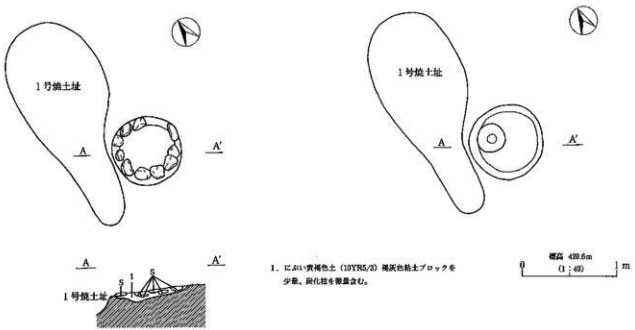
検出位置：Dう5グリッド。**重複関係**：なし。**平面形態**：径約80cmの円形を呈し、主軸方位はN－0°－E

を指す。地面を浅く掘り込んで、礫を敷き詰めた状態であった。**断面形態**：皿状を呈し、検出面からの深さは約８cmである。**覆土**：にぶい黄褐色土（10YR5/3）の単層であった。**遺物出土状況**：遺物は出土しなかった。**時期**：帰属時期は不明である。

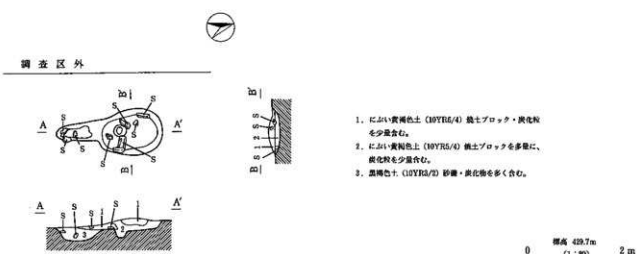
（２）１号焼土址

遺　構（第55図）

検出位置：Ｄう５、Ｄう６グリッド。**重複関係**：なし。**平面形態**：長軸約2.2m、短軸約１mの楕円形を呈し、主軸方位はＮ―17°―Ｅを指す。**断面形態**：逆台形を呈し、検出面からの深さは約25cmである。上部を粘土状の土で覆った、カマド状の構造物であったものと思われる。**覆土**：にぶい黄褐色土（10YR5/4）で覆われる構造であった。**遺物出土状況**：遺物は出土しなかった。**時期**：帰属時期は不明であるが、古代以降の所産であると思われる。



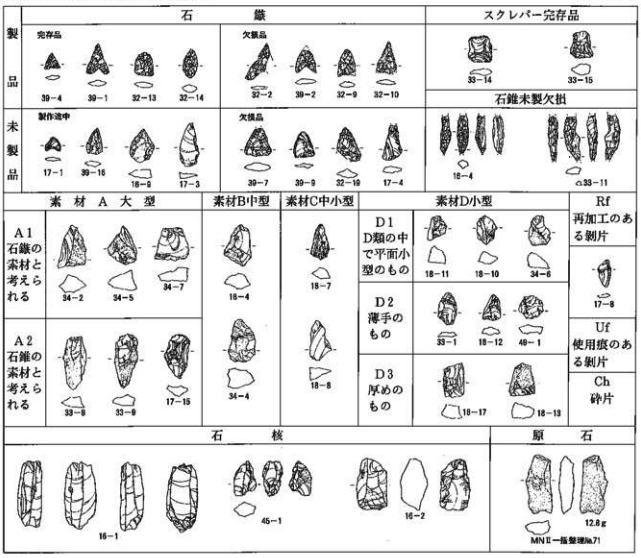
第54図　１号集石遺構実測図



第55図　１号焼土址実測図

町横尾遺跡Ⅱ出土黒耀石分類概念図

S＝1／3



町横尾遺跡Ⅱ出土黒耀石出土数（遺構毎の出土数を示すもので、必ずしも黒耀石の畑属時期を示すものではない）

遺構名	畑属時期	製品（欠損品含）		未製品（未製欠損品含）		製品	素材							剥片		砕片	石核	原石	総数
		石鏃	石錐	石鏃	石錐	スクレパー	A1	A2	B	C	D1	D2	D3	Rf	Uf	Ch			
H1	平安前半			1								1		1	1	17			21
H2	奈良				1					1		2	2			6			12
H3	縄文前期	3		13	3		5	3	15	9	12	9	2	1	3	93	2		173
H4	古墳後期												1			3			4
H5	古代								1							3			4
H6	平安前半										1		1			3			5
H7	弥生後期	13		7	1	2	5	1	10		17	15	4	2	6	164	1		248
H8	縄文前期	8		11	1			5	8		11	2	2		1	124			173
H9	縄文前期			1				1	4		5	5	3			35			54
H10	古墳後期	2						2		2	3	1	2			120			132
D14	古代～中世											1				2			3
D15	縄文前期											1			1	2			4
D16	縄文前期															9			9
D17	弥生後期			1												1			2
D18	不明													1					1
D21	縄文前期															2			2
遺構外	不明						1	1	2		3					10		1	18
計		26	－	34	6	2	11	13	40	12	52	37	17	5	12	594	3	1	865

第1表　掲載土器観察表

〈　〉推定値　（　）残存値を示す。

掲載No	遺構	取揚No	整理No	種別	器種	残存区	法量（cm） 口径	底径	器高	調整・文様 外面	内面	色調 外面	内面	胎土	備考
7-1	H1	7	7	縄文土器	坏	完形	13.5	3.5	6.0	ロクロヨコナデ、底部回転糸切り	ロクロヨコナデ	外内）2.5YT/2灰黄色		MMII H1南No7、aボ、aK小型	
7-2	H1	6	6	縄文土器	坏	口縁部	12.0	3.1	6.2	ロクロヨコナデ、底部回転糸切り	ロクロヨコナデ	外内）10GR/1暗灰色		MMII H1南No8	
7-3	H1	3	3	縄文土器	坏	口一底部 1/2	(13.0)	3.8	(6.8)	ロクロヨコナデ、底部回転糸切り	ロクロヨコナデ	外端）10YR4/2灰黄褐色 内）7.5YR5/2灰オリーブ色		MMII H1東No3、aK中層、b区中層、b区上層	
7-4	H1		11	縄文土器	坏	口一底部 1/4	(13.0)	2.5	(5.3)	ロクロヨコナデ、底部回転糸切り	ロクロヨコナデ	外内端）10GR/1暗灰色		MMII H1南a区、b区中層、b区床面	
7-5	H1		10	縄文土器	坏	口一底部 1/2	(13.0)	2.7	(7.4)	ロクロヨコナデ、底部回転糸切り	ロクロヨコナデ	外内端）7.5YR6/1灰色		MMII H1南a区、aK中層	
7-6	H1		12	縄文土器	鉢型鉢	口一胴中部	(9.6)	(6.0)	—	ロクロヨコナデ	ロクロヨコナデ	外内端）2.5GY5/1暗オリーブ灰色		MMII H1南a区、aK中層、床上層	自然釉付着
7-7	H1	5	5	土師器	鉢	口一胴部	—	(10.4)	—	口一胴部）ヨコナデ、縦一胴部ハケメ ケズリ	ヨコナデ	外内端）5YR5/6明赤褐色		MMII H1南No5	
7-8	H1	13	13	土師器	甕	底部	—	(4.8)	6.1	ヘラケズラ、底部ヘラケズリ	ハケメ	外）2.5YR5/4にぶい赤褐色 内）7.5YR7/3にぶい橙色		MMII H1南a区、b区中層	
10-1	H2		3	縄文土器	坏	口一底部 1/2	(12.5)	4.0	(9.0)	ロクロヨコナデ、底部糸切後ロクロ調整	ロクロヨコナデ	外内）2.5YR4/1灰黄色 脚）10YR4/1灰黄褐色		MMII H2南bK サブトレ	
11-1	H2		4	縄文	深鉢	胴部片	—	—	—	横位撚糸押ろ日・斜位条痕文	ナデ	外内端）7.5YR5/2にぶい褐色		MMII H2検索	神ノ木
14-1	H3	1	1	縄文	深鉢	胴部片	—	—	—	撚糸条痕文、縦転方向短撚による羽状縄文	ナデ	外内端）7.5YR4/2褐色		MMII H3南No1	舟後縄
14-2	H3	10	10	縄文	深鉢	口一胴部 1/8	—	—	—	羽状縄文（結束差しと原体不明）	ナデ	外内）7.5YR4/3褐色 脚）7.5YR3/1黒褐色		MMII H3南No10	舟後縄 岡山Ⅱか
	H3	18	18	縄文	深鉢	胴部片	—	—	—	羽状縄文（結束差しと原体不明）	ナデ	外内端）10YR5/3にぶい黄褐色		MMII H3南No18	
14-3	H3		26	縄文	深鉢	胴部片	—	—	—	長条縄文	ナデ	外内端）10YR5/4にぶい黄褐色		MMII H3東P1	
14-4	H3		41	縄文	深鉢	胴部片	—	—	—	羽状縄文回転方向転換による羽状縄文	ナデ	外端）10YR5/4にぶい黄褐色 内）10YR5/4にぶい黄褐色		MMII H3西bK	舟後縄 岡山Ⅱか
14-5	H3		48	縄文	深鉢	胴部片	—		—	無節縄文	ナデ	外内端）7YR4/4にぶい黄褐色		MMII H3東P1	舟後縄
14-6	H3	2	2	縄文	深鉢	胴部片	—	—	—	撚糸工具による結束日文	ナデ	外内端）7.5YR5/6明褐色		MMII H3西No2	神ノ木
14-7	H3		35	縄文	深鉢	胴部片	—	—	—	浅い撚糸	ナデ	外内端）10YR4/3にぶい黄褐色		MMII H3東bK	神ノ木
14-8	H3		34	縄文	深鉢	口縁部片	—	—	—	縦位結束による連続結束日文	ナデ	外内端）10YR5/4にぶい黄褐色		MMII H3東bK	神ノ木 黒島縄
14-9	H3		49	縄文	深鉢	底部片	—	—	—	撚糸工具による連続結束日文	ナデ	外）5YR4/4にぶい赤褐色 内端）5YR3/4暗赤褐色		MMII H3東bK	神ノ木 黒島縄
14-10	H3	11	11	縄文	深鉢	胴部片	—	—	—	束の縄	ナデ	外内端）10YR5/3にぶい黄褐色		MMII H3南No11	
14-11	H3		46	縄文	深鉢	胴部片	—	—	—	3L+L1R縄文結束羽状縄文	ナデ	外端）5YR4/6赤褐色 内）10YR4/2褐灰色		MMII H3北西 サブトレ	
14-12	H3		43	縄文	深鉢	胴部片	—	—	—	3L1R縄文縦転方向転換による羽状縄文	ナデ	外内端）10YR4/2にぶい黄褐色		MMII H3北西	
14-13	H3		45	縄文	深鉢	胴部片	—	—	—	1L縄文と2L縄文結束羽状縄文による羽状縄文	ナデ	外内）7.5YR6/6明褐色 脚）7.5YR5/2黒褐色		MMII H3北西bK サブトレ	舟後縄
14-14	H3		40	縄文	深鉢	胴部片		—	—	短節縄結束	ナデ	外）10YR4/2にぶい黄褐色 内端）7.5YR5/4にぶい褐色		MMII H3北西	
14-15	H3		42	縄文	深鉢	胴部片	—	—	—	3L1R縄文結束方向転換による羽状縄文	ナデ	外内端）10YR5/4にぶい黄褐色		MMII H3北西	舟後縄
14-16	H3	21	21	縄文	深鉢	口縁部	—	—	—	無節縄文、口縁部結束日	ナデ	外内）10YR5/3にぶい黄褐色 脚）10YR3/1黒褐色		MMII H3南No21、4区	舟後縄
14-17	H3		44	縄文	深鉢	胴部片	—	—	—	3L1R縄文	ナデ	外）7.5YR4/6褐色 内端）7.5YR3/2黒褐色		MMII H3南bK サブトレ	中期b
14-18	H3		47	縄文	深鉢	胴部片	—	—	—	3L1R縄文	ナデ	外内端）5YR5/4にぶい黄褐色		MMII H3北西	舟後縄
14-19	H3		38	縄文	深鉢	胴部片	—	—	—	無節原体	ナデ	外内端）7.5YR5/4にぶい褐色		MMII H3北西bK サブトレ	
14-20	H3		37	縄文	深鉢	胴部片	—	—	—	無節原体	ナデ	外内端）7.5YR5/4にぶい褐色		MMII H3北西	
14-21	H3		36	縄文	深鉢	胴部片	—	—	—	単節縄文結束日文	ナデ	外内端）7.5YR4/3褐色		MMII H3北西	
14-22	H3		36	縄文	深鉢	胴部片	—	—	—	押型文	ナデ	外内端）5YR4/4にぶい赤褐色		MMII H3北西	
20-1	H4	4	4	土師器	壺	口一底部 3/4	13.5	15.7	7.5	ナデ、底部木葉痕	ナデ	外内端）5YR5/6明赤褐色		MMII H4北東No4、c区サブトレ	
20-2	H4	8	8	土師器	甕	胴一底部 2/3	—	(10.0)	8.5	丁寧なヘラミガキ、底部木葉痕	ヘラナデ	外内端）7.5YR5/4にぶい赤褐色		MMII H4南No8	
20-3	H4	6	6	土師器	甕	底部	—	(4.8)	8.5	ヘラナデ、底部木葉痕	ヘラナデ	外）10YR3/3暗褐色 内）7.5YR5/4にぶい褐色		MMII H4南No6	

第２表　掲載土器観察表

〈　〉推定値　（　）残存値を示す。

図版No	遺構	挿図No	整理No	種別	器種	残存度	法量（cm）口径	器高	底径	調整・文様 外部	内面	色調	胎土	焼成	備考
33-4	H4	3	2	土師器	鉢	胴部片	—	—	—	ヘラケズリ	ナデ	外面）10YR6/3灰黄褐色 内）10YR5/4にぶい黄橙色	MM II H4Ni2		
33-1	H4	13	12	縄文	深鉢	底部1/2	—	(3.6)	(9.0)	横斜位・縦に走る連続刺突文	ナデ	外内面）7.5YR5/4にぶい赤褐色	MM II H4Ni3底上・中・下層	鈴ノ木集落跡	
34-1	H5	1	1	須恵器	蓋	胴部	—	—	—	格子目押圧目文	青海波文	外内面）N5/0灰色	MM II H5Ni4	同一個体	
		2	3	須恵器	蓋	胴部	—	—	—	格子目押圧目文	青海波文		MM II H5Ni5		
		3	3	須恵器	蓋	胴部	—	—	—	格子状押圧目文	青海波文		MM II H5Ni3		
		4	4	須恵器	蓋	胴部	—	—	—	格子目押圧目文	青海波文		MM II H5Ni6		
		5	5	須恵器	蓋	胴部	—	—	—	格子目押圧目文	青海波文		MM II H5Ni5		
34-2	H5	6	6	土師器	坏	口～底部1/3	(15.0)	(3.4)	—	ロクロヨコナデ	ロクロヨコナデ	外内面）10YR7/2にぶい黄橙色	MM II H6Ni8		
27-1	H6	9	9	須恵器	坏	口～底部1/3	(11.8)	3.7	6.0	ロクロヨコナデ、底部回転糸切り	ロクロヨコナデ	外内面）5YR5/1灰色	MM II H6Ni9	馬渡上遺跡 I区廃土	
27-2	H6	1	1	須恵器	長頸瓶	口～頸部1/3	(7.7)	(15.5)	—	ロクロヨコナデ	ロクロヨコナデ	外内面）N5/0灰色	MM II H6Ni1		
27-3	H6	10	10	土師器	坏	口～底部3/4	(14.5)	(5.5)	7.4	ロクロヨコナデ、底部回転糸切り	ロクロヨコナデ	外内面）5YR6/6橙色	MM II H6Ni10		
27-4	H6	4	4	土師器	長頸瓶	口～頸部片	(22.2)	(7.2)	—	口縁部）ヨコナデ 頸部）ヘラケズリ	ナデ	外内面）5YR5/1灰色	MM II H6Ni4		
27-5	H6	13	13	土師器	甕	口～胴部1/5	(12.0)	(5.5)	—	ヨコナデ	ヨコナデ	外内面）7.5YR5/4にぶい橙色	MM II H6Ni13		
39-1	H7	1	1	弥生	高坏	坏部底部	26.0	22.0	16.5	丁寧なヘラミガキ・赤色塗彩	丁寧なヘラミガキ・赤色塗彩	坏内外、脚外）10R4/8赤色 脚内、裾）5YR7/4にぶい橙色	MM II H7Ei1		
30-2	H7	17	17	弥生	浅鉢	口～底部3/5	15.6	6.0	(5.2)	横位ヘラミガキ・赤色塗彩	横位ヘラミガキ・赤色塗彩	外内）2.5YR4/4にぶい赤褐色 脚）5YR3/1黒褐色	MM II H7Ei17		
30-3	H7	15	18	弥生	浅鉢	底部1/3	—	(4.5)	(4.5)	横位ヘラミガキ・赤色塗彩	横位ヘラミガキ・赤色塗彩	外内）2.5YR4/4にぶい赤褐色 脚）5YR3/1黒褐色	MM II H7Ei18		
30-4	H7		30	弥生	壺	頸部片	—	—	—	細い単沈線による縦重文	ナデ	外内面）5YR4/4にぶい赤褐色	MM II H7Ei4	大原	
30-5	H7	7	7	弥生	壺	胴～底部1/3	—	(13.6)	8.5	ヘラミガキ	ハケメ	外内面）7.5YR5/4にぶい橙色	MM II H7Ei7		
35-6	H7	5	5	弥生	壺	頸部片	—	—	—	6本一組の櫛描き波状文（下→上）・同工具による簾状文隆起帯、刺突隆起文→櫛描波状文	ヨコナデ	外内面）7.5YR5/4にぶい橙色	MM II H7Ei5		
35-7	H7	3	3	弥生	甕	口縁部	11.6	15.1	6.0	4～5本　櫛描き波状文（上→下）	ヘラミガキ	外内面）7.5YR3/4にぶい褐色	MM II H7Ei3		
35-8	H7	19	19	弥生	甕	口～胴部1/4	13.1	(12.0)	—	6本一組の櫛描き波状文（下→上）・同工具による簾状文隆起帯	ヨコナデ	外内面）7.5YR3/4にぶい褐色	MM II H7Ei No19、E区上層		
35-9	H7	2	2	弥生	甕	口～胴部2/3	12.0	(8.5)	—	8～9本　櫛の櫛描き波状文（上→下）	ヘラミガキ	外内面）7.5YR4/4褐色	MM II H7Ei No2		
35-10	H7	15	15	弥生	甕	底部	—	—	7.8	ナデ、底部ヘラミガキ	ナデ	外内面）10YR4/4褐色	MM II H7Ei No15		
35-1	H7		29	縄文	深鉢	胴部片	—	—	—	組合せ沈線文	ナデ	外内面）10YR4/3にぶい黄褐色	MM II H7Ei深		
35-2	H7		28	縄文	深鉢	胴部片	—	—	—	半截竹管刺による束行沈線文	ナデ	外内面）7.5YR4/3褐色	MM II H7Ei深	有茎	
35-3	H7		25	縄文	深鉢	胴部片	—	—	—	LR縄文後部他縦走縄結束・結・RL縄文縦横他縦結束若干結による羽状縄文、刺突帯付文	丁寧なミガキ	外内面）10YR6/3にぶい黄橙色	MM II H7Ei	諸磯b	
35-4	H7		32	縄文	深鉢	口縁部片	—	—	—	櫛歯状工具による連続刺突文	丁寧なミガキ	外内）10YR5/4にぶい黄橙色 断）10YR4/3褐色	MM II H7Ei深	鈴ノ木集落跡	
35-5	H7		30	縄文	深鉢	底部片	—	—	—	櫛歯状工具による連続刺突文	ナデ	外内面）7.5YR3/4にぶい褐色	MM II H7Ei底面	鈴ノ木集落跡	
35-6	H7	8	8	縄文	深鉢	底部	—	(4.4)	9.2	連続刺目文	ヘラナデ	外内面）10YR5/6黄褐色	MM II H7Ei No8	関山II期	
35-7	H7		21	縄文	深鉢	胴部片	—	—	—	RL縄文による結節羽状縄文	ナデ	外内）10YR4/3にぶい黄褐色 断）10YR2/1黒色	MM II H7Ei	諸磯II 古縄期	
35-8	H7		22	縄文	深鉢	胴部片		—	—	RL縄文による結節羽状縄文	ナデ	外内）10YR4/3にぶい黄褐色 断）10YR2/1黒色	MM II H7Ei	諸磯II 古縄期	
35-9	H7		34	縄文	深鉢	胴部片	—	—	—	蛇の縄	ナデ	外内面）7.5YR5/4にぶい黄褐色	MM II H7Ei深III	関山II期	
35-10	H7		35	縄文	深鉢	胴部片	—	—	—	蛇の縄	ナデ	外内面）7.5YR5/6明褐色	MM II H7Ei カクラン	関山II期	
35-11	H7		36	縄文	深鉢	胴部片	—	—	—	RL縄文縦横結束結束方向変換による羽状縄文	ナデ	外内面）10YR4/2灰黄褐色	MM II H7Ei カクラン	諸磯	
35-12	H7		27	縄文	深鉢	胴部片	—	—	—	縦条体回転施文	ナデ	外内）10Y3/2にぶい黄橙色 断）10YR2/1黒褐色	MM II H7Ei カクラン		
35-13	H7		37	縄文	深鉢	胴部片	—	—	—	RL縄文縦横結束結束方向変換による羽状縄文	ナデ	外内面）5YR5/6明赤褐色	MM II H7Ei深		
35-14	H7		33	縄文	深鉢	胴部片	—	—	—	縦条体回転施文か	ナデ	外内面）10YR4/4褐色	MM II H7Ei		
35-15	H7		31	縄文	深鉢	胴部片	—	—	—	ループ文・多段撚糸	ナデ	外内面）10YR3/1黒褐色	MM II H7Ei		
35-16	H7		23	縄文	深鉢	胴部片	—	—	—	半截竹管連続刺突文による結心円文	ナデ	外内面）10YR4/4褐色	MM II H7Ei	関山II 古縄期	

第3表　掲載土器・金属製品観察表

〈　〉推定値　（　）残存値を示す。

図版No	遺構	遺物No	整理No	種別	器種	残存度	法量（cm） 口径	器高	底径	調整・文様 外面	内面	色調 外面	内面	備考	備考
35-17	H7		26	縄文	深鉢	口縁部片	—	(3.6)	欠底	3L縄文	丁寧なナデ	外内）7.5YR5/4にぶい黄褐色 断）7.5YR3/1黒褐色		MMⅡH7出	早・前期
37-1	H9		32	縄文	深鉢	胴部片	—	—		半截竹管圧による波状沈線文	ナデ	外）10YR4/3にぶい黄褐色 内断）10YR2/1黒色		MMⅡH9出	金鶏線
37-2	H9		34	縄文	深鉢	口縁部片	—	—	—	3L縄文、口唇部に棒状工具刻文	丁寧なミガキ	外内）10YR6/4にぶい黄橙色 断）10YR2/1黒色		MMⅡH9出サブトレ	関山Ⅱ 金鶏線
37-3	H9		35	縄文	深鉢	胴部片	—	—	—	1L縄文による結節羽状縄文	ナデ	外）5YR5/6明赤褐色 内）7.5YR3/4にぶい褐色 断）10YR2/1黒色		MMⅡH9出	
37-4	H9	4	4	縄文	深鉢	口縁部片	—	—	—	折り返し口縁、棒状工具による連続刺突文	ナデ	外内断）7.5YR6/4にぶい橙色		MMⅡH9出No4	神ノ木
37-5	H9		33	縄文	深鉢	口縁部片	—	—	—	棒状工具による連続刺突文	ナデ	外）10YR4/3にぶい黄褐色 内断）10YR5/4にぶい黄褐色		MMⅡH9出	神ノ木
37-6	H9		32	縄文	深鉢	底部片	—	—	—	網目撚糸圧	ナデ	外内断）10YR6/4にぶい黄色		MMⅡH9出	神ノ木類 黒系統
37-7	H9	12	12	縄文	深鉢	胴部片	—	—	—	3L縄文縄帯体による羽状縄文	ナデ	外内断）7.5YR5/3にぶい黄褐色		MMⅡH9出No12	金鶏線
37-8	H9		37	縄文	深鉢	底部片	—	—	—	3L縄文縄部間重回転方向変換による羽状縄文	ナデ	外内断）7.5YR5/6明褐色		MMⅡH9出	金鶏線
37-9	H9		40	縄文	深鉢	胴部片	—	—	—	3L縄文縄部間重回転方向変換による羽状縄文	ナデ	外内断）7.5YR5/6明褐色		MMⅡH9出	
37-10	H9	10	10	縄文	深鉢	底部片	—	—	—	3L縄文縄部間重回転方向変換による羽状縄文	ナデ	外内断）10YR5/4にぶい黄褐色		MMⅡH9出No10	
37-11	H9		30	縄文	深鉢	胴部片	—	—	—	3L縄文縄部間重回転方向変換による羽状縄文	ナデ	外内）10YR6/4にぶい黄橙色 断）10YR2/1黒色		MMⅡH9出	金鶏線
37-12	H9		36	縄文	深鉢	胴部片	—	—	—	歪の縄	ナデ	外内断）7.5YR5/4にぶい褐色		MMⅡH9出サブトレ	関山Ⅱ期
37-13	H9		38	縄文	深鉢	口縁部片	—	—		3L縄文縄部間重回転方向変換による羽状縄文	ナデ	外内）10YR4/2灰黄褐色 断）10YR2/1黒色		MMⅡH9出	金鶏線
37-14	H9		34	縄文	深鉢	胴部片	—	—	—	結束羽状縄文	ナデ	外内断）7.5YR5/4にぶい褐色		MMⅡH9出	
37-15	H9	1	1	縄文	深鉢	胴部片	—	—	—	3L縄文縄部亀甲結合による羽状縄文	ナデ	外内断）10YR5/4にぶい黄褐色		MMⅡH9出No1	
37-16	H9		35	縄文	深鉢	胴部片	—	—	—	結束羽状縄文	ナデ	外内断）7.5YR5/6明褐色		MMⅡH9出	
37-17	H9		26	縄文	深鉢	口縁部片	—	—	—	波状口縁、1L縄文・半截竹管間・連続刺み目文による渦巻モチーフに沿う鋸歯状文	丁寧なミガキ	外内）10YR3/1黒褐色 断）10YR2/1黒色		MMⅡH9出	関山Ⅱ 金鶏線
37-18	H9		31	縄文	深鉢	胴部片	—	—	—	結束羽状縄文か	ナデ	外内断）10YR3/2黒褐色		MMⅡH9出	
37-19	H9	18	18	縄文	深鉢	口縁部片	—	—	—	1L縄文による結束羽状縄文	ナデ	外内断）10YR4/3にぶい黄褐色		MMⅡH9出No18	金鶏線
37-20	H9		28	縄文	深鉢	胴部片	—	—	—	4+1Lの撚糸条縄文	ナデ	外内断）10YR5/3黒褐色		MMⅡH9出	関山Ⅱ期 金鶏線
37-21	H9	16	16	縄文	深鉢	口縁部片	—	—	—	結束羽状縄文か	ナデ	外内断）10YR4/3にぶい黄褐色		MMⅡH9出No16	
37-22	H9		27	縄文	深鉢	胴部片	—	—	—	半截竹管圧によるコンパス文	ナデ	外内）7.5YR5/4にぶい褐色 断）7.5YR3/1黒色		MMⅡH9出	関山Ⅱ 金鶏線
37-23	H9		25	縄文	深鉢	胴部片	—	—	—	縦結節体	ナデ	外内7.5YR5/4にぶい褐色 断）7.5YR3/1黒色		MMⅡH9出	関山Ⅱ期 金鶏線
37-24	H9		29	縄文	深鉢	底部片	—	—	—	無節	ナデ	外）10YR6/4にぶい黄橙色 内断）10YR3/1黒褐色		MMⅡH9出	早期朝
43-1	H9		5	縄文	深鉢	胴部片	—	—	—	結束羽根転縄文か	ナデ	外内断）10YR3/2黒褐色		MMⅡH9出	
43-2	H9		6	縄文	深鉢	胴部片	—	—	—	歪の縄	ナデ	外内断）10YR5/3にぶい黄褐色		MMⅡH9出	関山Ⅱ期
43-3	H9		7	縄文	深鉢	口縁部片	—	—	—	波状口縁・1L縄文結節羽根転の可変撚による羽状縄文	ナデ	外内）10YR4/3にぶい黄褐色 断）10YR2/1黒色		MMⅡH9出	金鶏線
43-4	H9	3	3	縄文	深鉢	胴部片	—	—	—	3L縄文・半截竹管表によるコンパス文	丁寧なヘラミガキ	外内）7.5YR4/3褐色 断）7.5YR3/1黒色		MMⅡH9出No3	関山Ⅱ 金鶏線
43-5	H9	2-1	2-1	縄文	深鉢	胴部片	—	—	—	3L外結体による羽状縄文	丁寧なナデ	外内断）7.5YR5/4にぶい褐色		MMⅡH9出No2	金鶏線
43-6	H9	2-2	2-2	縄文	深鉢	口縁部片	—	—	—	撚糸圧文による羽状縄文	丁寧なナデ	外内断）7.5YR4/2灰黄褐色		MMⅡH9出No2	擬似孔ア 金鶏線
43-7	H9		4	縄文	深鉢	口縁部片	—	—	—	押型文	丁寧なナデ	外内断）5YR4/3にぶい赤褐色		MMⅡH9出	早期
44-1	H10	1	1	土師器	鉢	ロ一部残 1/2	(19.0)	(27.8)	7.0	胴位ヘラナデ	ナデ	外内断）7.5YR5/4にぶい褐色		MMⅡH10出No1	延上段元
48-1	D14		1	中世	古銭	完形	タテ 2.4	ヨコ 2.4	厚さ 0.2	大定通宝				MMⅡD14	大定通宝
50-1	D16		1	縄文	深鉢	胴部片	—	—	—	結束羽状縄文	ナデ	外内断）7.5YR5/4にぶい褐色		MMⅡD16	金鶏線
50-2	D16		3	縄文	深鉢	胴部片	—	—	—	3L縄文縄部間重回転方向変換による羽状縄文	ナデ	外内断）7.5YR4/2灰黄褐色		MMⅡD16	金鶏線
50-3	D16		2	縄文	深鉢	胴部片	—	—	—	結束羽状縄文	ナデ	外内断）7.5YR4/2灰黄褐色		MMⅡD16	金鶏線
51-1	D17		1	弥生	壺	胴部片	—	—	—	櫛描き波状文	ヘラナデ	外内断）7.5YR5/4にぶい褐色		MMⅡD17	
53-1	D21		1	縄文	深鉢	胴部片	—	—	—	3L縄文縄部間重回転方向変換による羽状縄文	ナデ	外内断）7.5YR5/4にぶい褐色		MMⅡD21	金鶏線
53-2	D21		2	縄文	深鉢	胴部片	—	—	—	ループ文	ナデ	外内断）7.5YR5/4にぶい褐色		MMⅡD21	先鶏線

第4表　掲載石器観察表（黒耀石・石英以外）

掲載No	遺構	層位No	層位No	種別	器種分類	石質	残存度	法量（cm） 長さ	幅	厚さ	質量（g）	出土	備考
8-4	H1	2	2	剥片類	剥石	安山岩	1/3欠	19.7	12.7	5.7	1850.0	MM#1(1)No2	大部の周囲辺平な自然石の、表面と側面に広く消磨痕が認められる。
12-6	H2		3	剥石類	磨石 叩石	安山岩	1/2欠	7.5	6.2	3.3	226.0	MM#1(2)自区サブトレ	側面周辺平の楕円形平円礫の先端部に顕著な敲打痕を残し、表面と側面に磨痕を残す。
13-7	H3	1	1	剥石類	剥石	安山岩	完存	14.6	13.1	6.7	1084.0	MM#1(2)No1	円形に近い楕状に整き、その中央に敲打痕の小さな敲打痕を残す。
15-1	H3	17	17	剥石類	剥石	安山岩	完存	11.6	9.5	4.9	757.7	MM#1(3)No17	周辺を面円礫の表裏面に浅い敲打痕を残す。
15-2	H3	16	16	剥石類	剥石	流紋岩	1/2欠	8.8	8.3	5.3	353.0	MM#1(3)No16	円形扁円礫の全面に顕著な敲打痕を残し、側面に磨痕痕を残す。
22-3	H4	9	9	剥片石器	石錐	安山岩	基部欠損	13.3	8.3	1.8	117.0	MM#1(4)No9	楕円形全体に浅い加工剥離痕を施し、尖端石器の形状を呈する。
22-3	H4		12	剥石類	剥石	安山岩	1/4欠	7.6	6.5	3.0	171.4	MM#1(4)E式中・下部	周辺を面円礫の表裏面に浅い敲打痕を残す。
22-4	H4	1	1	剥石類	剥石	安山岩	完存	8.9	8.1	4.2	354.1	MM#1(4)No1	周辺を楕円礫の表裏面と側面に浅い敲打痕を残す。
22-5	H4	3	3	剥石類	磨石	安山岩	完存	11.8	7.8	3.5	362.6	MM#1(4)No3	扁平な楕円礫の表裏面に磨痕痕を残す。
22-6	H4		13	剥石類	敲石	安山岩	完存	4.4	4.2	3.5	71.1	MM#1(4)自区上層	断面楕円礫の円礫で表裏面に浅い敲打痕を残す。
22-7	H4	10	10	剥石類	石斧	安山岩	完存	34.0	26.7	9.0	10kg以上 計測不能	MM#1(4)No10	大きな河原自然石の表裏に浅い側面を持ち、左側面一部消に若干の敲打痕を残す。
22-8	H4	5	5	剥石類	石斧	安山岩	1/3欠	29.5	19.2	5.8	3280.0	MM#1(4)No5	大きな河原自然石の表裏に浅い側面を持ち、若干の敲打痕を残す。
25-1	H6		8	剥石類	敲石	頁岩	完存	8.6	5.5	3.0	36.4	MM#1(5)自カクド	扁平薄片の頁岩試子類の表裏面に、浅い敲打痕を残す。
26-2	H6	2	2	剥石類	石斧	安山岩	完存	35.3	24.5	11.5	10kg以上 計測不能	MM#1(6)No22	厚く長い大きい河原自然礫の中央、両端部に作り敲打痕を残す。
31-1	H7		17	剥片石器	鋸歯石器	頁岩	1/3欠	3.7	3.6	0.4	13.5	MM#1(7)E区サブトレ	表裏面からの厚み毛を有し、表裏面ともに丁寧な磨きを施し、成形している。
31-2	H7	16	16	剥片石器	打製石器	頁岩	完存	4.7	10.6	0.8	39.3	MM#1(7)No16	表裏面に自然面を一部残し、不定形に扶り制離する部分を持つ。裏側は周縁よりの粗い剥離により調整され、表面は主剥剥離面に若干調整を施している。
31-3	H7	10	10	剥石類	剥石	安山岩	完存	11.2	8.6	4.8	635.5	MM#1(7)No10	扁平な楕円礫の側面に顕著な磨痕痕を残し、表面に磨痕痕を残す。表面に若干凹んだ部分が認められる。
31-4	H7	6	6	剥石類	磨石 敲石	安山岩	1/4欠	11.1	12.7	5.4	1183.6	MM#1(7)No6	扁平な楕円礫の表裏一部と長辺一部に顕著な磨痕痕を残し、側面に顕著な敲打痕が認められる。
33-1	H8	24	24	剥片石器	打製石斧	安山岩	完存	8.7	4.3	0.8	19.4	MM#1(8)E区一部	敲石状の表裏に浅い剥離を施し、長辺に細かい剥離調整を施し、刃部に鋸歯を作出する。
36-2	H8	23	23	剥片石器	打製石器	頁岩	完存	4.2	8.2	0.8	33.1	MM#1(8)H区サブトレ	表裏面ともに自然より粗い剥離により調整しているが、刃部の調整も粗く未製品の可能性がある。
36-3	H8	25	25	剥石類	敲石か	砂岩	1/4欠	4.7	3.0	1.0	13.5	MM#1(8)E区一部	硬い小礫の端角部表面に細かい磨痕痕を残す。
36-4	H8	20	20	剥石類	磨石	安山岩	完存	10.0	9.7	4.2	608.9	MM#1(8)No20	断面扁平の円礫を使用し、表面に磨痕痕を残す。
36-5	H8	22	22	剥石類	磨石	輝石	完存	7.4	5.6	5.0	53.3	MM#1(8)E区一部	断面円形様の小さな自然石の表面の一部に弱い消磨痕痕が認められる。
38-6	H8	19	19	剥石類	磨石 敲石	安山岩	1/2欠	7.6	8.0	4.3	747.7	MM#1(8)No19	断面扁平の円礫を使用し、表面・側面に広く消磨痕を残し、端部に敲打痕が確認できる。
38-7	H8	5	5	剥石類	磨石	安山岩	完存	11.0	8.7	4.0	510.9	MM#1(8)No5	断面扁平楕円礫の表面に浅い敲打痕が残る。
38-8	H8	6	6	剥石類	敲石 磨石	安山岩	完存	13.0	9.2	3.7	749.4	MM#1(8)No6	断面扁平の円礫を使用し、表面部および側面に顕著に浅い敲打痕が認められる。表面面に広く消磨痕を残す。
38-9	H8	21	21	剥石類	磨石	安山岩	完存	10.5	16.3	9.1	194.0	MM#1(8)No21	硬い扁角礫の表面および側面に顕著に一部に消磨痕を残す。加工痕により使用したものか。
45-9	H10	3	3	剥石類	敲石	安山岩	完存	12.3	6.6	4.5	606.2	MM#1(10)No3	断面扁平の円礫の表裏面に広く消磨痕が確認できる。
53-3	D21		1	剥石類	磨石	安山岩	完存	5.1	4.6	3.2	115.4	MM#1(D21)上層	断面扁平の円礫の表裏面に広く消磨痕が確認できる。

第5表　掲載石器観察表（黒曜石・石英）

掲載No	遺構	番号No	器種	器種分類	石質	風化度	法量(cm) 長さ	幅	厚さ	重量(g)	特記	備考
8-1	H1	25	石鏃	未製品	黒曜石	—	2.2	1.5	0.6	1.5	MMH1H1Eb区	不純物のやや多い素材を使用し、正面離面を広く残す。
8-2	H1	127	掻材	D2	泥質石	—	2.2	1.6	0.5	1.4	MMH1H1E底面	断面三角形で不純物をやや含む。
8-3	H1	66	掻片	H1	黒曜石	—	3.3	1.4	0.5	1.1	MMH1H1Ec区中側	主面上に剥離に自然面を残す薄い掻片の表面調整に、細かい剥離調整を施す。
12-1	H2	27	石鏃	未製品	泥質石	—	2.5	1.8	0.5	1.7	MMH1H2Ec	厚みの割を持つ素材を使用し、表面に自然面を広く残す。
12-2	H2	159	素材	D2	黒曜石	—	2.5	1.7	1.4	5.1	H2E区	断面三角形で不純物を含み、上縁と側面に自然面を残す。
12-3	H2	198	素材	D2	黒曜石	—	3.5	1.3	1.0	6.3	H2H3Ec区サブトレ	断面三角形で正面に剥離痕を残す。
12-4	H2	125	素材	D2	黒曜石	—	2.0	2.2	0.8	2.1	MMH1H2Eb区サブトレ	断面で角張りで純物をやや含み、正面に自然面を残す。
12-5	H2	61	石斧	素材	黒曜石	—	4.5	1.7	1.0	5.3	MMH1H2Ec区	トドおよびが側面に自然面を残し、表面に主剥離剥面を広く残す。純物の少ない素材を正面から小さな剥離により調整する。
16-1	H5	159	石斧	—	泥質石	—	5.3	2.4	1.8	24.5	MMH1H5E No13	下方略形に不純物を含むが、全体に磨かれ丸元。剥面は開った不角形で、うち剥は上方より剥は下方より剥的に最長の剥離を行なう。
16-2	H5	154	石鏃	—	黒曜石	—	4.0	2.3	1.9	30.9	MMH1H5非	断面円角形で、縦断面に剥離痕、一部に自然面を残す。剥離は上方と下方からそれぞれ剥離の後、表面側を上下よりそれぞれ剥長に調整を行なう。
16-3	H5	153	石核	—	黒曜石	—	5.0	3.2	1.6	34.7	MMH1H5円	不純物を多く含み剥れ上方より広く剥離する。
16-4	H5	62	石鏃	未製品	泥質石	基部半欠	3.0	0.9	0.8	1.6	MMH1H5Eb区	断面が高い素材を使用し、側面は主剥離面を未調整のまま残し、正面の下半分剥離調整中に破損が生じたことで製作を中断したと考えられる。
16-5	H5	1	石鏃	製品 下基部	泥質石	完存	2.0	1.4	0.4	0.7	MMH1H5E黒点	不純物を多く含む素材を使用し、粗い剥離を施す。
16-6	H5	30	石鏃	未製品	黒曜石	—	2.1	1.4	0.7	1.5	MMH1H5Eb区	不純物をやや含む素材を使用し、今回に粗い剥離を施すが残みを伸ばすことより未製品と判断した。
16-7	H5	9	石鏃	製品欠損 凸基脚	黒曜石	基部一部欠	2.2	1.7	0.5	1.3	MMH1H5Ec区サブトレ	不純物を多く含む素材を使用するが、丁寧な剥離を施す。
16-8	H5	32	石鏃	未製品	黒曜石	—	1.7	1.5	0.3	1.1	MMH1H5Ed区	不純物のやや多い素材を使用し、粗い剥離により形態を作出する。
16-9	H5	35	石鏃	未製品	泥質石	—	2.7	1.9	0.7	3.7	MMH1H5Ed区	断面が三角形を持つ。表裏共ともに剥離に粗い剥離を施す。
16-10	H5	44	石鏃	未製品 欠損凸	泥質石	剥離から中央一部欠	2.1	1.6	0.5	1.0	MMH1H5Ed区	断面は主要剥離面を未調整を残し、表面は粗い剥離の後剥離よりの細かい剥離調整中に粗い剥離が中央に残ったために製作を中断したと考えられる。
16-11	H5	10	石鏃	製品欠損 脚基部	黒曜石	片脚欠	1.5	1.1	0.3	0.3	MMH1H5Eb区	若干不純物を含む素材を使用するが、丁寧な剥離を施す。
16-12	H5	38	石鏃	未製品	黒曜石	—	2.0	1.9	0.6	1.0	MMH1H5Ed区サブトレ	不純物をやや含み、細かい結を持つ素材を使用する。
16-13	H5	39	石鏃	未製品	黒曜石	—	2.3	1.8	0.4	1.1	MMH1H5Ed区	表裏に広く自然面を残し、表裏は未調整のまま主剥離面を残す。
16-14	H5	45	石鏃	未製 欠損品	黒曜石	側面半欠	2.0	1.6	0.5	0.6	MMH1H5Ec区	透明度の高い黒曜石剥離面を広く残す素材を使用し、正面に剥離よりの細かい剥離を施すが、表裏から側面に切断したことにより製作を中断したと考えられる。
17-1	H5	31	石鏃	未製品	黒曜石	—	1.3	1.2	0.2	0.3	MMH1H5Ed区	透明度の高い素材を使用し、小さな形状を呈す。表裏縁辺に細かい剥離調整を施すが、表裏共ともに主剥離面を広く残し、表裏は未調整であることより未製品と判断した。
17-2	H5	42	石鏃	未製 欠損品	泥質石	側面半欠	1.7	1.3	0.5	0.8	MMH1H5Ed区	表裏に主要剥離面を未調整に残し、正面は全体に粗い剥離の後、周縁よりの細かい剥離中に大きく素材を切断したことにより製作を中断したと考えられる。
17-3	H5	63	石鏃	未製品	泥質石	—	3.4	2.0	0.6	2.0	MMH1H5Ec クラン	表裏共に主剥離面と共通に自然面を残す素材を使用し、正面縁辺に細かい剥離を施す。
17-4	H5	41	石鏃	未製 欠損品	先端部欠	先端部欠	2.7	1.4	0.5	1.9	MMH1H5E19	不純物の多い素材を使用し、全体に粗い剥離の後、片側縁よりの細かい剥離調整時に、先端部を切断したことより製作を中断したと考えられる。
17-5	H5	49	石鏃	未製 欠損品	黒曜石	先端部欠	2.1	1.9	0.8	2.7	MMH1H5Ea区	表裏面に自然面を多く残す厚三角形の素材を使用し、周縁に細かい剥離を施しながら整形途中に正面からの打撃により先端部を欠損し、製作を中断したと考えられる。
17-6	H5	43	石鏃	未製 欠損品	泥質石	基部半欠	2.0	1.2	0.4	0.7	MMH1H5Eb区	表裏縁に剥離面を残す厚い薄手の素材を使用し、周縁に細かい剥離調整を施す。正面よりの打撃により側縁に切断され製作を中断したと考えられる。
17-7	H5	46	石鏃	未製 欠損品	泥質石	先端部欠	1.7	1.5	0.3	0.7	MMH1H5Ea区	透明度の高い黒曜石に主要剥離面を広く残す薄手材を使用し、周縁に表裏交互の剥離調整中、側縁に切断したことで製作を中断したと考えられる。
17-8	H5	57	剥片	R1	泥質石	—	2.2	1.1	0.5	0.4	MMH1H5Eb区	主面に自然面を残す、透明度の高い薄く小さな剥片の上縁部に細かい剥離を施す。
17-9	H5	75	素材	A1	泥質石	—	3.5	1.9	1.5	9.8	MMH1H5E東端	黒曜に主要剥離面を、横断に自然面を残す扁平色の不純物の無い素材。
17-10	H5	73	素材	A1	黒曜石	—	3.7	2.5	1.6	9.2	MMH1H5Eb区	断面三角形で、側面縁辺自然面、裏側面に大きな剥離、主要剥離面を各面に持つ。
17-11	H5	72	素材	A1	泥質石	—	3.4	2.0	0.8	6.1	MMH1H5Ec区サブトレ	上面側に裏剥面を残し、表面に長方向の剥離的な剥離を施す。

第6表　掲載石器観察表（黒曜石・石英）

図版No	遺構	原版No	写真No	種別	器種分類	石質	残存度	法量 (cm) 長さ	幅	厚さ	質量 (g)	法　量	備　考
17-13	H3		74	素材	A1	黒曜石	—	3.2	2.4	1.4	19.6	MM II H3 住ぼ床	断面方形で、両縁に自然面と節理面を残す。
17-13	H3		76	素材	A1	黒曜石	—	3.0	4.6	1.5	15.5	MM II H3 住ぼ床	表面側に節理面を広く残す。
17-14	H3		83	素材	A2	黒曜石	—	3.9	1.9	0.9	5.9	MM II H3 住ぼ	透明度が高く黒い結晶を持つ素材を使用し、断面三角形の山形部を残す。
17-15	H3		82	素材	A2	黒曜石	—	3.5	1.8	0.8	4.2	MM II H3 住ぼ	不純物を含み不ぞろいな形を呈する。
17-16	H3		88	素材	B1	黒曜石		3.8	1.9	0.9	7.9	MM II H3 住ぼ	片側縁に自然面を残し、表裏面に細い剥離を施す。
16-1	H3		92	素材	B1	黒曜石	—	3.0	1.7	1.0	4.6	MM II H3 住ぼ	金属に細い剥離を施し、断面"三角形に整形する。
16-2	H3		94	素材	B1	黒曜石	—	3.2	1.9	1.0	5.2	MM II H3 住ぼ	全面に細い剥離を施し、断面三角形に整形する。
16-3	H3		90	素材	B1	黒曜石	—	3.8	2.0	1.5	7.8	MM II H3 住ぼ サブトレ	断面三角形で、表裏面に自然面を残す。
16-4	H3		86	素材	B1	黒曜石	—	3.3	2.1	1.2	6.4	MM II H3 住ぼ	断面三角形で、側面に自然面を残す。
16-5	H3		93	素材	B1	黒曜石	—	3.5	2.0	1.1	5.3	MM II H3 住P4	金属に細い剥離を施し、断面"三角形に整形する。
16-6	H3		91	素材	B1	黒曜石	—	2.7	2.1	1.1	6.5	MM II H3 住ぼ サブトレ	断面角形で、上面に自然面を残す。
16-7	H3		107	素材	C1	黒曜石	—	2.8	1.4	0.9	3.3	MM II H3 住ぼ	扁平で表裏面に節理面を残し、側面を狭い剥離で整形する。
16-8	H3		106	素材	C1	黒曜石	—	3.1	1.6	1.0	4.3	MM II H3 住ぼ	扁平断面三角形で上側面に自然面を残す。
16-9	H3		110	素材	D1	黒曜石		2.6	1.5	1.0	3.4	MM II H3 住ぼ区	整形剥ぎ自然面を残す。
16-10	H3		109	素材	D1	黒曜石	—	2.3	1.5	1.1	3.6	MM II H3 住ぼ床	不純物を多くみ、断面三角形を呈する。
16-11	H3		111	素材	D1	黒曜石	—	1.9	1.2	1.2	4.1	MM II H3 住P1	不純物を多くみ、片側面に自然面を残す。
16-12	H3		133	素材	D1	黒曜石	—	3.0	1.4	0.7	1.5	MM II H3 住ぼ	断面三角形で不純物をやや含み、側面一部に自然面を残す。
16-13	H3		132	素材	D3	黒曜石	—	2.5	1.9	0.9	5.0	MM II H3 住ぼ サブトレ	断面"三角形で上面と片側面、表裏面に自然面を残す。
16-14	H3		131	素材	D2	黒曜石	—	3.6	1.7	0.7	2.0	MM II H3 住ぼ	断面"三角形で不純物をやや含む。
16-15	H3		129	素材	D2	黒曜石	—	2.6	2.0	0.7	2.7	MM II H3 住ぼ	断面三角形で不純物をやや含む。
16-16	H3		130	素材	D2	黒曜石	—	2.9	1.8	0.7	2.8	MM II H3 住ぼ	断面三角形で不純物をやや含む。
16-17	H3		160	素材	D3	黒曜石		3.3	1.7	1.3	5.3	H3 住ぼ	断面三角形で不純物をやや含む。
22-1	H4		147	素材	D5	黒曜石	—	3.2	2.4	1.5	8.1	MM II H4 住ぼ ド層	断面"三角形で、下側面は自然面を広く残す。
22-1	H6		148	素材	D5	黒曜石	—	2.2	1.1	0.9	3.7	MM II H6 住ホ ド	断面三角形を残し、側面端で細かく持ちやすい素材。
22-2	H6		146	素材	D5	黒曜石	—	3.0	1.5	0.9	4.1	MM II H6 住ぼ 下層	扁平で側面に自然面を残す。
22-1	H7		165	石核	—	黒曜石	—	3.4	2.8	1.8	14.5	H7 住ぼ 中層	不純物を多くみ小石状。素材で自然面を残す。上下側縁より小さな剥離での調整がなされ、サイコロ様の不定形を呈する。
22-2	H7		11	石器	製品欠損或打痕跡か	黒曜石	片縁欠	2.9	1.2	0.3	0.7	MM II H7 住ぼ 底	極微な不純物の少ない素材を使用し、丁寧な調整を施す。本遺跡は石器で比較的大きな平面形を。
22-3	H7		3	石器	製品未完成品	黒曜石	完存	2.0	1.2	0.3	0.4	MM II H7 住ぼ 底	透明度の高い素材を使用し、丁寧な調整を施す。
22-4	H7		13	石器	製品欠損 刺基部	黒曜石	先端部強欠	2.2	1.5	0.4	0.4	MM II H7 住ぼ 下層	透明度の高い素材を使用し、丁寧な調整を施す。
22-5	H7		2	石器	製品 尖頭器	黒曜石	完存	1.8	1.5	0.4	0.5	MM II H7 住 地床	透明度の高い素材を使用し、丁寧な調整を施す。
22-6	H7		16	石器	製品欠損 尖頭器	黒曜石	片側欠	2.1	1.4	0.4	0.8	MM II H7 住ぼ 床上層	整かに不純物を含む素材を使用するが、丁寧な調整を施す。
22-7	H7		18	石器	製品欠損 尖頭器	黒曜石	片側強欠	1.6	(1.2)	0.3	0.4	MM II H7 住 地床	透明度の高い素材を使用し、鋭めな調整を施す。
22-8	H7		14	石器	製品欠損	黒曜石	先端・片側強欠	1.2	1.2	0.4	0.4	MM II H7 住ぼ 床上層	不純物の少ない素材を使用し、丁寧な調整を施す。本遺跡は十分微少ではあるが小さな平面形を。
22-9	H7		17	石器	製品欠損	黒曜石	基部欠	1.7	(0.8)	0.3	0.3	MM II H7 住ぼ 下層	丁寧な調整を施す。
22-10	H7		12	石器	製品欠損 平基部	黒曜石	基部端部強欠	2.6	1.6	0.4	1.0	MM II H7 住ぼ 床上層	表面は丁寧な調整を施すが、裏面は粗雑調整を広く残し修正に細かい剥離調整を施す。
22-11	H7		19	石器	製品欠損 平基部	黒曜石	基部・端部欠	2.0	(1.5)	0.5	0.7	MM II H7 住ぼ 床上層	不純物の多い素材を使用し、表面は粗い剥離を施すが裏面は丁寧な調整を施す。
22-12	H7		15	石器	製品欠損 平基部	黒曜石	基部・先端部強欠	2.0	1.6	0.5	1.2	MM II H7 住 地床	黒色の縞を持つ素材を使用し、丁寧な調整を施す。
22-13	H7		4	石器	製品 平基部	黒曜石	完存	1.8	1.5	0.4	1.0	MM II H7 住ぼ 床上層	透明度の高い素材を使用し、丁寧な調整が施される。
22-14	H7		5	石器	製品	黒曜石	完存	3.2	1.2	0.7	1.4	MM II H7 住ぼ 底	小型の尖頭器様の形態を持ち、丁寧な調整を施す。
22-15	H7		35	石器	未製品	黒曜石		2.2	2.0	0.9	3.1	MM II H7 住 地面	表面の自然面の角度を中心に、側に剥離による形成の形跡を存置する。
22-16	H7		34	石器	未製品	黒曜石		3.3	2.0	1.0	4.1	MM II H7 住 地床	細かい縞を持つ素材を使用し、粗い剥離で厚みの形跡を存置する。
22-17	H7		61	石器	未製 欠損品	黒曜石	基部強欠	1.8	(1.5)	0.5	0.9	MM II H7 住ぼ 床上層	不純物の細い素材を使用し、裏面全面に丁寧な剥離調整を施した後、周縁よりの細かい剥離調整により形状整形に至り製作を中断したと考える。
22-18	H7		62	石器	未製 欠損品	黒曜石	脚部半欠	2.0	1.4	0.4	0.7	MM II H7 住ぼ 床上層	透明度の高い素材を使用し、表裏全面に丁寧な剥離調整を施した後、平面周縁よりの細かい剥離調整により形状整形に至り製作を中断したと考える。
22-19	H7		63	石器	未製品 刺基部	黒曜石	片側欠	2.7	1.7	0.7	1.8	MM II H7 住 地床	表裏面の高い素材を使用し、表裏を面に細い剥離を施した後、中央の厚い部分の整形中に裏面中央よりの打撃により厚部を大きく欠損したことで製作を中断したと考えられる。

第7表　掲載石器観察表（黒曜石・石英）

掲載No	遺構	挿図No	図版No	種別	器種分類	石質	残存/度	法量（cm）長さ	幅	厚さ	質量（g）	採記	備考
32-20	H7		50	石器	未製品欠損品	黒曜石	鋸歯半欠	2.0	1.3	0.4	0.5	MM31H7住床面	薄明度の高い素材を使用し出面の粗い調整による整形中に、中央より側部に切断したことで製作を中断したと考えられる。
32-21	H7		49	石器	未製品欠損品	黒曜石	先端部欠	1.6	1.5	0.4	1.3	MM31H7住床面	表面前に平型剥離を低く残す素材を使用し、正面片側縁に細かい調整剥離を施すが、裏面からの打撃により微出に切断したことで製作を中断したと考えられる。
32-22	H7		138	素材	D2	黒曜石	—	2.5	1.5	0.6	1.8	MM31H7住底下層	断面縦平三角形で不純物を中や含み、裏面に自然面を残す。
33-1	H7		132	素材	D2	黒曜石	—	2.5	1.4	0.6	1.9	MM31H7住ベルト	断面縦平三角形で裏面に上端剥離を残す。
33-2	H7		142	素材	D2	黒曜石	—	2.4	2.0	0.7	1.9	MM31H7住ベルト	断面縦平三角形で下側面に自然面を残す。
33-3	H7		134	素材	D2	黒曜石	—	3.0	1.8	0.6	1.6	MM31H7住ベルト	断面三角形で裏面に自然面を残す。
33-4	H7		137	素材	D2	黒曜石	—	3.0	1.1	0.7	2.2	MM31H7住床下層	断面三角形で不純物をやや含む。
33-5	H7		135	素材	D2	黒曜石	—	2.6	1.3	0.9	3.0	MM31H7住床	断面"角形で不純物をやや含む。
33-6	H7		136	素材	D2	黒曜石	—	3.0	2.0	0.7	2.8	MM31H7住ベルト上層	断面三角形で不純物をやや含む。
33-7	H7		140	素材	D2	黒曜石	—	3.4	2.4	1.0	5.3	MM31H7住床下層	断面三角形で、上面と側面に自然面を残す。
33-8	H7		85	素材	A2	黒曜石	—	4.1	1.8	1.0	5.0	MM31H7住ベルト上層	表裏側面に自然面を残し、片側縁に広い調整を施し整形する。
33-9	H7		84	素材	A2	黒曜石	—	4.2	1.8	0.9	7.1	MM31H7住床	表裏面に自然面を残し不純物を多く含む素材。
33-10	H7	8	63	剥片	製品	石英	稜線優欠	2.7	0.7	0.5	0.8	MM31H7住ベルト	全面に狭く細かい調整を丁寧に施す。
33-11	H7		64	石器	未製欠損	黒曜石	剥離一部欠	3.5	1.1	0.8	1.9	MM31H7住床上層	先端と周側縁に自然面を残す素材を使用し、側縁からの細かい剥離調整中に、平面中央側縁からの打撃により、横位切断したことで製作を中断したと考えられる。
33-12	H7		66	剥片	R2	黒曜石	—	3.5	1.8	0.6	1.7	MM31H7住ベルト	片側縁と表面に自然面を残し、不純物の多い薄い剥片の片側縁に連続する細かい調整剥離を施す。
33-13	H7		69	剥片	R2	黒曜石	—	2.5	1.5	0.6	1.6	MM31H7住床直	片側縁と表面に自然面を残し、他の側面に背側面を残す剥片を使用し、先端から片側縁に連続する細かい調整剥離を施す。
33-14	H7		48	スクレーパー	製品	黒曜石	完形	2.1	1.8	0.7	2.2	MM31H7住ベルト上層	全体に粗い剥離の後、側面に丁寧な剥離を施す。
33-15	H7		47	スクレーパー	製品	黒曜石	完形	2.1	1.7	0.8	2.6	MM31H7住ベルト上層	全体に粗い剥離の後、側面に丁寧な剥離を施し、上側面に自然面を残す。
34-1	H7		78	素材	A1	黒曜石	—	4.2	3.3	1.9	14.5	MM31H7住床	表裏に広く自然面を残し、縁面に粗い剥離を施す。
34-2	H7		77	素材	A1	黒曜石	—	3.3	2.2	1.2	7.1	MM31H7住ベルト下層	表裏に広く自然面を残し、縁面に粗い剥離を施す。
34-3	H7		95	素材	B1	黒曜石	—	3.2	2.4	0.8	6.9	MM31H7住ベルト下層	全面に粗い剥離を施し、断面三角形に整形する。
34-4	H7		97	素材	B1	黒曜石	—	3.5	2.1	1.3	8.5	MM31H7住床直	断面"角形で、表裏と片側縁に自然面を残す。
34-5	H7		80	素材	A1	黒曜石	—	3.0	2.2	1.4	8.5	MM31H7住焼面南	表裏面に自然面を残す。
34-6	H7		99	素材	B1	黒曜石	—	3.5	2.3	0.7	6.4	MM31H7住床	断面かまぼこ型で、表裏に自然面を残す。
34-7	H7		79	素材	A1	黒曜石	—	3.4	2.1	1.1	7.2	MM31H7住埋土	表裏と上側面に自然面を残す。
34-8	H7		96	素材	B1	黒曜石	—	3.0	2.0	0.8	4.4	MM31H7住ベルト	全面に粗い剥離の後、片縁辺に細かい剥離調整を施し、断面三角形に整形する。
34-9	H7		98	素材	B1	黒曜石		2.9	1.7	1.3	3.2	MM31H7住ベルト上層	台座の縁を持つ素材で裏面三角形で、片側面に自然面を残す。
34-10	H7		115	素材	D1	黒曜石	—	2.5	2.1	0.6	2.5	MM31H7住ベルト	断面縦平で不純物は含まず、裏面五了角形に自然面を残す。
34-11	H7		113	素材	D1	黒曜石	—	2.2	1.8	0.8	2.2	MM31H7住ベルト下層	断面"角形で、不純と粗面に自然面を残す。
34-12	H7		116	素材	D1	黒曜石	—	2.5	1.5	0.8	2.0	MM31H7住床直	断面三角形で、上側面に自然面を残す。
34-13	H7		114	素材	D1	黒曜石	—	1.9	1.5	1.1	2.0	MM31H7住床下層	断面三角形で、表面に自然面を残す。
34-14	H7		117	素材	D1	黒曜石		2.2	2.0	0.9	3.7	MM31H7住ベルト	断面U字で不純物をやや含み、側面に自然面を残す。
34-15	H7		118	素材	D1	黒曜石	—	1.9	1.9	1.0	2.4	MM31H7住ベルト上層	断面縦平で不純物をやや含む。
34-16	H7		133	素材	D1	黒曜石	—	2.3	1.7	0.9	2.1	MM31H7住床直	表裏平角形で正面と側面に自然面を残す。
38-1	H8	14-1	6	石器	製品 剥離器	頁岩石	完形	2.4	1.5	0.5	0.9	MM31H8住No14-1	薄明度の高い素材を使用し、丁寧な剥離を施す。
38-2	H8	14	25	石器	製品欠損	黒曜石	鋸歯半欠	(2.1)	1.6	0.5	0.7	MM31H8住No14	黒色の縁を持つ素材を使用し、粗い剥離を施す。
38-3	H8	14	23	石器	製品欠損 剥離器	頁岩石	片割 鋸歯欠	1.7	(1.4)	0.4	0.4	MM31H8住No14	不純物のやや多い素材を使用する。丁寧な剥離を施す。
38-4	H8	14-2	7	石器	製品 凹基鏃	黒曜石	完形	1.2	1.2	0.3	0.3	MM31H8住No14-2	褐色色の素材を使用し、丁寧な剥離を施す。
38-5	H8	14	24	石器	製品欠損	黒曜石	基部側欠	1.7	1.4	0.4	0.7	MM31H8住No14	不純物のやや多い素材を使用し、表裏面に丁寧な剥離を施す。
38-6	H8		30	石器	製品欠損	黒曜石	基部側面 片側縁欠	(2.0)	2.1	0.5	1.3	MM31H8住	不純物の多い素材を使用する。丁寧な剥離を施す。
38-7	H8		39	石器	未製 欠損品	黒曜石	先端部欠	2.2	2.1	0.6	2.2	MM31H8住No14	不純物をやや含む部分の素材を使用し、表裏面に粗い剥離調整を施した後、階段からの剥離調整中に剥離よりの打撃により先端部を切断し、製作を中断したと考えられる。
38-8	H8		21	石器	製品欠損 平基鏃	黒曜石	先端部欠	1.5	1.8	0.3	0.6	MM31H8住	不純物のやや多い素材を使用する。丁寧な剥離を施す。
38-9	H8	14	22	石器	製品欠損 平基鏃	黒曜石	基部端部 先欠	2.1	1.5	0.3	0.7	MM31H8住No14	黒色の縁を持つ素材を使用し、粗い剥離を施す。
38-10	H8		37	石器	未製品	頁岩石		2.1	1.3	0.4	1.0	MM31H8住	表裏面に自然面を持つ薄い素材を使用する。

第８表　掲載石器観察表（黒曜石・石英）

図版No	遺構	現地No	整理No	種別	形態分類	石質	残存度	現量（cm） 長さ	幅	厚さ	質量（g）	注記	備考
39-11	H8		54	石鏃	未製欠損品	黒曜石	脚先半欠	1.6	1.6	0.3	0.4	MMⅢH8住	透明度が高く下側面に自然面を持つ小さ目の素材を使用し、周辺加工調整中に半欠損状態で切断したことで製作を中断したと考えられる。
39-12	H8		57	石鏃	未製欠損品	黒曜石	脚先半欠	1.3	1.2	0.4	0.5	MMⅢH8住26o3	透明度の高い素材を使用し、表裏面に主剥離面を広く残し周縁に最終工程剥離による調整中に機能切断に至る。その後も裏面に細かい調整を施し製作を続けるが未完作先からの打撃により器型切断に至り、製作を断念したと考えられる。
39-13	H8		58	石鏃	未製欠損品	黒曜石	脚先半欠	1.4	1.5	0.4	0.4	MMⅢH8住	不純物の多い素材を使用し、表裏面に広く主剥離面を残し、周縁の細かい調整調整中に基部中央からの打撃により、脚先部に至り製作を中断したと考えられる。
39-14	H8		55	石鏃	未製欠損品	黒曜石	脚先半欠	1.5	1.9	0.5	0.8	MMⅢH8住	透明度が高く黒い縞を持つ素材を使用し、表裏面に広く主剥離面を残し、周縁よりの調整調整中に右側縁からの打撃により脚先切断したことで製作を中断したと考えられる。
39-15	H8		56	石鏃	未製品	黒曜石		2.2	1.8	0.5	1.6	MMⅢH8住	透明度が高く、縞縞に黒斑点を正面に白斑点を残す素材を使用し、周縁よりやや細かい調整調整を施す。
39-16	H8		36	石鏃	未製品	黒曜石		2.8	1.9	0.4	1.8	MMⅢH8住	黒い縞を持つ素材を使用し、側面に自然面を持つ。
39-17	H8		38	石鏃	未製品	黒曜石		3.0	2.5	1.2	7.8	MMⅢH8住	不純物を少量含む黒い素材を使用する。
40-1	H8		103	素材	B1	黒曜石	—	3.6	2.1	1.0	6.8	MMⅢH8住	全面に粗い調整を施し、断面二角形に整形する。
40-2	H8		101	素材	B1	黒曜石	—	3.5	2.4	1.1	7.2	MMⅢH8住	断面三角形で右側面に自然面を残す。
40-3	H8		100	素材	B1	黒曜石	—	3.1	2.2	0.9	5.7	MMⅢH8住	断面三角形で右側面に自然面を残す。
40-4	H8		131	素材	D1	黒曜石	—	2.2	1.5	1.0	3.1	MMⅢH8住	断面三角形で、上側面に粗雑調整を残す。
40-5	H8		120	素材	D1	黒曜石	—	2.2	1.7	1.3	5.0	MMⅢH8住	サイコロ様で、正面と上面に自然面を残す。
40-6	H8		102	素材	B1	黒曜石	—	2.5	2.4	1.5	8.0	MMⅢH8住	凸版の縞を持つ素材で断面三角形で、上側面に自然面を残す。
40-7	H8		141	素材	D2	黒曜石	—	3.4	1.8	0.6	2.4	MMⅢH8住	断面菱形三角形で不純物をやや含み、左側面と正面に自然面を残す。
40-8	H8		142	素材	D2	黒曜石	—	2.2	1.8	0.7	3.7	MMⅢH8住	断面ﾏﾒ形で、裏面に自然面を残す。
40-9	H8		87	素材	A2	黒曜石	—	4.4	2.3	1.2	10.1	MMⅢH8住	側面に自然面を残し不純物をやや含む素材。
40-10	H8		86	素材	A3	黒曜石	—	4.5	2.0	1.2	9.2	MMⅢH8住	上下端に自然面を残し、表裏面に広い剥離を施し整形する。
40-11	H8		85	石鏃	製品	黒曜石	脚部欠	3.7	1.5	0.8	2.9	MMⅢH8住	右上側面に整理面を残すかまま周縁から丁寧な調整調整を施し、特に先端部は先端部に細く整形される。
45-1	H10		151	素材	D3	黒曜石	—	2.7	1.7	1.3	6.4	MMⅢH10住	サイコロ様で自然面を一部に残し、不純物を含む赤茶色の縞を持つ素材。
45-2	H10		157	石鏃	製品欠損 無茎鏃	黒曜石	片脚鏃部欠損	2.0	1.5	0.3	0.8	H10住ｻブトレ	表面中央に自然面を残すが、丁寧な調整を施す。
45-3	H10		156	石鏃	製品欠損 無茎鏃	黒曜石	片脚欠損	2.3	1.8	0.3	0.8	H10住ﾍﾞｽ	丁寧な調整を施す。
45-4	H10		124	素材	D1	黒曜石	—	2.3	1.6	0.8	2.7	MMⅢH10住	断面菱形で不純物を多く含む。
45-5	H10		144	素材	D2	黒曜石	—	2.5	1.8	0.5	2.1	MMⅢH10住ﾍﾞｽ	断面菱形で不純物をやや含む。
45-6	H10		125	素材	D1	黒曜石	—	2.7	1.9	1.1	5.3	MMⅢH10住	サイコロ様で、正面に自然面を残す。
45-7	H10		123	素材	D1	黒曜石	—	2.6	2.3	1.1	5.3	MMⅢH10住	サイコロ様で、裏面に自然面を残す。
45-8	H10		168	素材	C1	黒曜石	—	2.2	1.5	1.0	3.8	MMⅢH10住	不純物を多く含み両面に自然面を残す。
46-7	H14		145	素材	D2	黒曜石	—	2.2	1.6	0.5	1.9	MMⅢH14	断面菱形で片面が三角形で側面に自然面を残す。
49-1	D15		146	素材	D2	黒曜石	—	1.8	1.9	0.7	1.9	MMⅢD15	断面菱形で不純物をやや含む。
51-2	D17		60	石鏃	未製欠損品	黒曜石	脚先半欠	2.6	1.3	0.8	1.8	MMⅢD17	不純物が多く表面に平面剥離面を広く残す素材を使用し、片面全面に粗い再調整調整を施し、周縁よりのやや細い調整調整中に表面からの打撃により脚先切断に至り製作を中断したと考えられる。
53-1	D18		70	剥片	Ⅲ	黒曜石	—	1.5	1.4	0.7	1.3	MMⅢD18	正面に自然面を残すかるな剥片の片側縁に連続する側縁調整を施す。

第Ⅴ章　総括

本遺跡の発掘調査によって検出された遺構は縄文時代前期から弥生時代・古墳時代を経て奈良・平安時代～中世にいたる住居址10棟及び土坑址21基などであった。調査区が狭長でありながらかくも多くの遺構が検出されたことによって、周辺は密度の濃い遺構分布を示すものと思われる。

町横尾遺跡はこれまでの分布調査、本調査及び試掘調査によって縄文時代から平安時代にかけての集落遺跡と考えられていた。ことに奈良～平安時代にかけては検出遺構数も多く、この遺跡の主体的な時期を示すものとして理解されていた。また、近隣に所在する保地遺跡の存在から縄文時代後晩期の遺跡が広がる可能性をも秘めた遺跡であった。

今回の発掘調査では縄文時代後晩期に属する遺構・遺物は確認されなかったが、これまで町横尾遺跡では知られていなかったいくつかの事例を確認することができた。これらを踏まえつつ今回の調査成果を概観する。

まず、新知見としてあげることができるのが縄文時代前期の遺構・遺物の発見である。住居址３棟のほか、土坑を２基確認した。住居址からは関山期の土器片をはじめ、数多くの黒耀石製鏃や未製品及びチップなどが出土した。調査範囲が限られていたため、集落構造などは知るすべも無いが、かつてこの地で黒耀石製の石鏃を作りながら狩猟を行っていた人々が暮らしていたことが確認できた。

次に指摘できるのは弥生時代後期の住居跡の存在である。従来、現坂城中学校付近の宮上遺跡Ⅱや、テクノサカキ工業団地付近の塚田遺跡Ⅱが弥生時代の集落跡として知られていたが、山裾に近い本調査地点まで弥生時代に住居が作られていたことは新たな発見といえる。加えて、本調査地点から石包丁が出土したことが注目される。本遺跡内には水田に適した場所は確認し得ないので、谷川の開口部付近の塚田遺跡Ⅱ周辺に水田を経営していたのであろうか。

さらに、今回の調査では古墳時代の住居址（Ｈ４・10号住居址）が確認された。これまでの調査で当該期の遺構は確認されていなかったため、初の検出となった。坂城町では中之条地区の宮上遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳや寺浦遺跡Ⅱなどが古墳時代後期の集落址として顕著であるが、町横尾遺跡周辺においても集落が形成されていたかといった点については、今回の発掘調査結果からは不明と言わざるを得ない。なお、Ｈ４号住居址からは、槍型の石製品（22-２）が出土しているが帰属時期や用途は不明である。

先にも述べたが、本遺跡は奈良～平安時代にかけてが主体的な時期となり、今回の調査でも当該期の住居址を４棟検出した。今回の調査で特筆すべきは、Ｈ６号住居址から出土した墨書土器である。須恵器の坏に描かれたそれは「継」の一文字が読み取れ、その文字の前にも一文字存在していることから「□継」となり、人名の可能性（平川南氏教示）がある。近接する寺浦遺跡において当該期の掘立柱建物群が検出されていることから、当地にも役人的な人物が暮らしていた可能性が指摘できよう。このほか、床面付近から扁平な石材を多く出土した住居址（Ｈ６号住居址）の存在から、鉄製品など製造・加工する工房的なものの存在も予測されるが現段階では想像の域を出ない。

最後に、本町横尾遺跡と谷川を挟んだ対岸に所在する金井東遺跡群も町横尾遺跡とほぼ同様の時期の遺跡である。今回の調査成果を踏まえて、両遺跡の時期的や性格的な問題を比較検討して、谷川水系の古代社会の環境を分析する必要があろう。また、本調査地点から北に約１km離れた場所に所在する開畝遺跡も小河川付近に展開する集落址である。河川をはじめとする自然環境と、古代集落の関係についても科学的分析を行っていく必要があろう。

写　真　図　版

調査区全景（南より）

Ｈ１号住居址（西より）

Ｈ２号住居址（西より）

Ｈ３号住居址（南東より）

Ｈ４号住居址（西より）

Ｈ４号住居址遺物出土状況（北より）

Ｈ４号住居址遺物出土状況（南西より）

Ｈ４号住居址掘り方完掘状況（西より）

Ｈ５号住居址（南より）

Ｈ５号住居址カマド（南より）

Ｈ６号住居址（西より）

Ｈ６号住居址遺物出土状況（南西より）

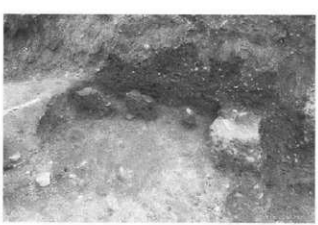
H７号住居址（南東より）

H７号住居址遺物出土状況（東より）

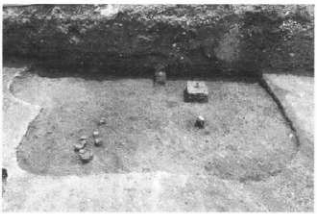
H７号住居址遺物出土状況（東より）

H８号住居址（東より）

H８号住居址遺物出土状況（北東より）



H９号住居址（北東より）



H10号住居址（西より）

H10号住居址遺物出土状況（南より）

1号集石遺構（南より）

D14号土坑址遺物出土状況（南より）

作業風景（北より）

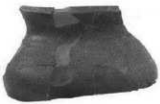
調査参加者

7－1

7－2

7－3

7－4


7－6

H１号住居址出土土器（１：３）

10－1

11－1

H２号住居址出土土器（１：３）

14－1

14－2

14－3

14－4

14－5

14－6

14－7

14－8

14－9

14－10

14－11

14－12

14－13

14－14

14－15

14－17

14－18

14－19

14－20

14－21

14－22

14－16

H３号住居址出土土器（１：３）

20－1

20－2

21－1

H４号住居址出土土器（１：３）

27－1

27－1（墨書部分）

27－2

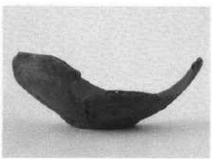
27－3

27－4

27－5

H６号住居址出土土器（１：３）

30－1



30－2

30－5

30－7

30－8

30－9

H７号住居址出土土器１（１：３）

30－4

30－6

35－1

35－2

35－3

35－4

35－5

35－7

35－8

35－9

35－10

35－11

35－12

35－13

35－14

35－15

35－16

35－17

H７号住居址出土土器２（１：３）

37－1

37－2

37－3

37－4

37－5

37－6

37－7

37－8

37－9

37－10

37－11

37－12

37－13　37－14

37－16

37－17

37－18

37－19

37－15

37－20

37－21

37－22

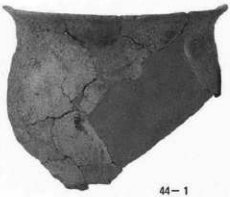
37－23

37－24

H８号住居址出土土器（１：３）

42－1　42－2　42－3　42－4　42－5　42－6　42－7

H９号住居址出土土器（１：３）



44－1

H10号住居址出土土器（１：３）

50－1　50－2　50－3

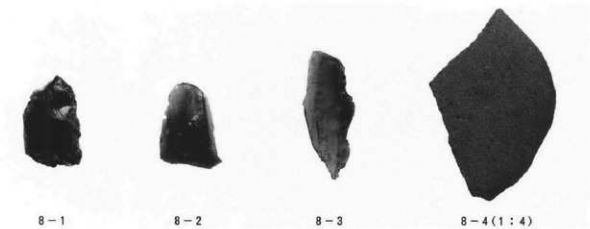
D16号土坑址出土土器（１：３）

51－1

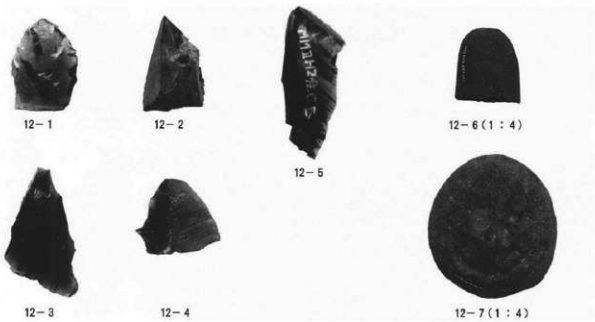
D17号土坑址出土土器（１：３）

53－1　53－2

D21号土坑址出土土器（１：３）

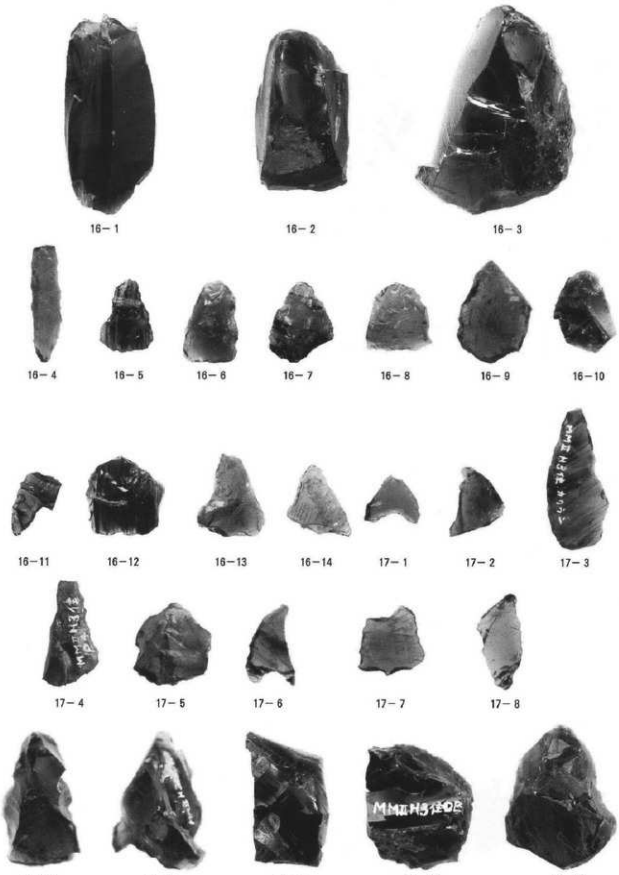


H１号住居址出土石器（1：1）

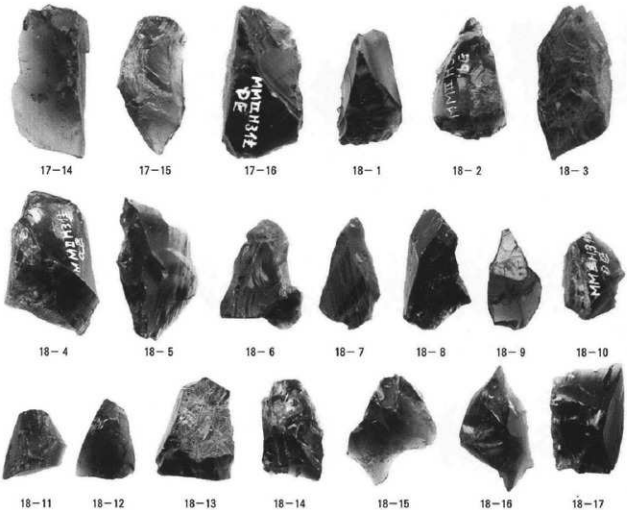


H２号住居址出土石器（1：1）

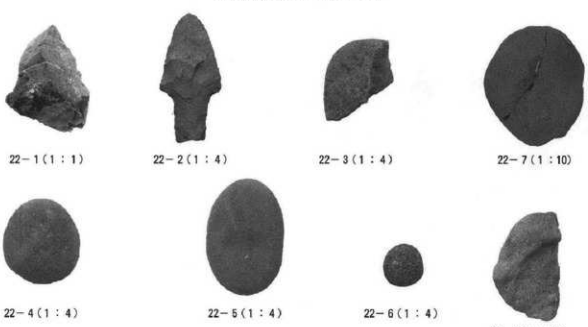
H３号住居址出土石器１（1：4）



H３号住居址出土石器２（１：１）



H 3 号住居址出土石器 3 （1 ： 1）



H 4 号住居址出土石器

25－1

Ｈ５号住居址出土石器（１：４）

28－1

28－2

28－3（１：10）

Ｈ６号住居址出土石器（１：１）

31－1（１：２）

31－2（１：２）

31－3（１：４）

31－4（１：４）

32－1

32－2

32－3

32－4

32－5

32－6

32－7

32－8

32－9

32－10

32－11

32－12

32－13

32－14

Ｈ７号住居址出土石器１（１：１）

32－15

32－16

32－17

32－18

32－19

32－20

32－21

32－22

33－1

33－2

33－3

33－4

33－5

33－6

33－7

33－8

33－9

33－10

33－11

33－12

33－13

33－14

33－15

34－1

34－2

34－3

34－4

34－5

34－6

34－7

34－8

34－9

34－10

34－11

34－12

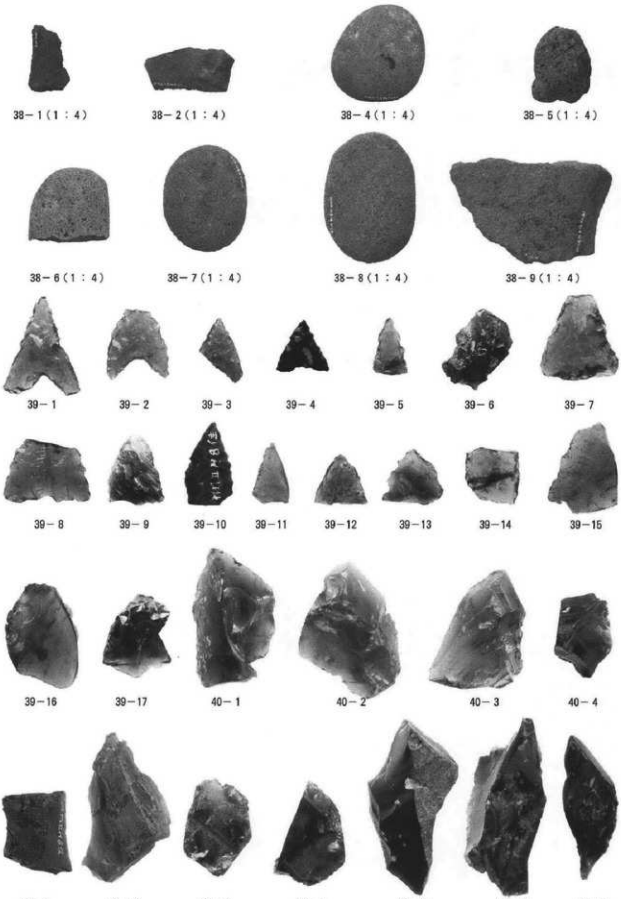
34－13

34－14

34－15

34－16

H７号住居址出土石器２（１：１）



H 8 号住居址出土石器（1：1）

45－1

45－2

45－3

45－4

45－5

45－6

45－7

45－8

45－9（1：4）

H10号住居址出土石器（1：1）

48－1

48－2

D14号土坑址出土遺物（1：1）

49－1

D15号土坑址出土遺物（1：1）

51－2

D17号土坑址出土遺物（1：1）

52－1

D18号土坑址出土遺物（1：1）

53－3

D21号土坑址出土遺物（1：1）

報告書抄録

ふりがな	まちよこおいせきに
書名	町横尾遺跡Ⅱ
副書名	長野県埴科郡坂城町坂都1号線道路改良事業に伴う緊急発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	坂城町埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第32集
編著者名	助川　朋広・田中　浩江・時信　武史
編集機関	坂城町教育委員会
所在地	〒389-0601　長野県埴科郡坂城町大字坂城6362－1　　TEL 0268-82-1109
発行年月日	2008年3月28日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
町横尾遺跡Ⅱ（まちよこおいせき）	埴科郡坂城町大字南条（はにしなぐんさかきまちおおあざなんじょう）	20521		36°26′29″	138°11′39″	2007年6月5日～2008年3月28日	800㎡	坂都1号線道路改良事業

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
町横尾遺跡Ⅱ	集落址	縄文～平安	竪穴住居址　10棟 土坑址　21基 集石遺構　1基 焼土址　1基	縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・石器・古銭	縄文～古代の集落址の調査

坂城町埋蔵文化財調査報告書

	『開畝製鉄遺跡－第１次調査報告書』	1977
	『開畝製鉄遺跡－第２次調査報告書』	1978
	『東裏遺跡』	1983
	『中之条遺跡群　宮上遺跡Ⅱ』（概報）	1993
	『南条遺跡群　塚田遺跡』	1993
第１集	『南条遺跡群　東裏遺跡Ⅱ・青木下遺跡』	1994
第２集	『町内遺跡発掘調査報告書』	1994
第３集	『町内遺跡発掘調査報告書』	1995
第４集	『南条遺跡群　塚田遺跡Ⅱ』	1995
第５集	『豊饒堂遺跡・上町遺跡・寺浦遺跡・東町遺跡』	1996
第６集	『中之条遺跡群　寺浦遺跡Ⅱ』	1996
第７集	『中之条遺跡群　上町遺跡Ⅱ』	1996
第８集	『上五明条里水田址』	1996
第９集	『町内遺跡発掘調査報告書1995』	1996
第10集	『坂城町試掘調査・立会い調査報告書』	1996
第11集	『町内遺跡発掘調査報告書1996』	1997
第12集	『戌久保・町横尾遺跡』	1998
第13集	『込山Ｂほか　発掘調査報告書　1997』	1998
第14集	『町内遺跡発掘調査報告書1998』	1999
第15集	『町内遺跡発掘調査報告書1999』	2000
第16集	『開畝遺跡Ⅲ』	2000
第17集	『中之条遺跡群　北川原遺跡Ⅱ』	2001
第18集	『町内遺跡発掘調査報告書2000』	2001
第19集	『中之条遺跡群　宮上遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ』	2001
第20集	『金井東遺跡群　保地遺跡Ⅱ』	2002
第21集	『町内遺跡発掘調査報告書2001』	2002
第22集	『町内遺跡発掘調査報告書2002』	2003
第23集	『豊饒堂遺跡Ⅲ』	2004
第24集	『坂城町町内遺跡発掘調査報告書2003』	2004
第25集	『坂城町内遺跡発掘調査報告書2004』	2005
第26集	『坂城町内遺跡発掘調査報告書2005』	2006
第27集	『込山遺跡群　込山Ｃ遺跡Ⅱ・Ⅲ』	2006
第28集	『込山遺跡群　込山Ｄ遺跡』	2007
第29集	『坂城町内遺跡発掘調査報告書2006』	2007
第30集	『南条遺跡群　青木下遺跡Ⅱ・Ⅲ』	2007
第31集	『開畝遺跡Ⅳ』	2008
第32集	『町横尾遺跡Ⅱ』（本書）	2008

坂城町埋蔵文化財調査報告書第32集

町横尾遺跡Ⅱ

発行日　2008年３月28日

編集者　坂城町教育委員会

〒389-0601　長野県埴科郡坂城町大字坂城6362－１

TEL　0268（82）1109

印刷者　信毎書籍印刷株式会社

〒381-0037　長野県長野市西和田１丁目30番３号

TEL　026（243）2105